

箱崎 59

— 箱崎遺跡第90次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1424集

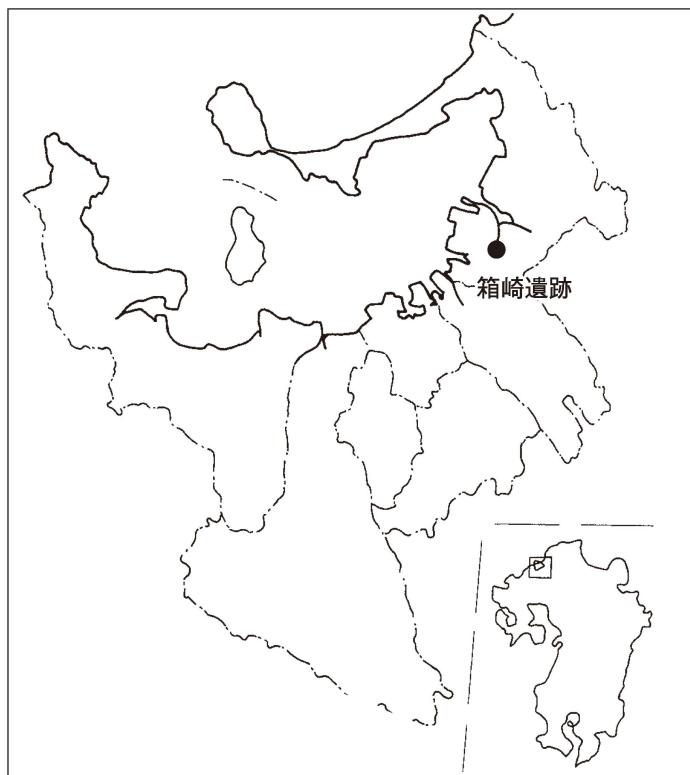
2 0 2 1

福岡市教育委員会

はこざき
箱崎 59

— 箱崎遺跡第90次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1424集



2021

福岡市教育委員会



1. 箱崎遺跡第90次東側調査区（西から）



2. 箱崎遺跡第90次西側調査区（西から）

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い、平成30年10月から11月にかけて発掘調査を実施した箱崎遺跡第90次調査の成果を報告するものです。遺跡のある箱崎は式内社筥崎宮の門前町として、さらには古代末から中世にかけて対外交渉の拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告は筥崎宮周辺区域の調査で、調査成果は対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、事業主をはじめ、関係者の方々とのご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市東区馬出5丁目99番（地番）で発掘調査を実施した箱崎遺跡第90次調査の報告である。
2. 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
1825	HKZ-90	217.67 m ²	138 m ²	2018年10月1日～11月21日
3. 本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当の佐藤一郎（埋蔵文化財課主任文化財主事）、実測は担当者の他、技能員の藤野雅基が行い、製図は資料整理補助職員の鳥井幸代・林由紀子・萩尾朱美が行った。
4. 遺物の実測は技能員の立石真二・棚町陽子・久富美智子・池田晃子、製図は鳥井・林・萩尾・立石が行った。
5. 遺物の整理は資料整理補助職員の鳥井・甲斐田嘉子が行った。
6. 遺構は3桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。
7. 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
8. 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

図版目次

- | | | |
|------|-----------------|------------------|
| 図版1 | 1.箱崎遺跡第90次西側調査区 | 2.SD03溝 |
| 図版2 | 1.SE07井戸 | 2.SE01井戸上面検出状況 |
| 図版3 | 1.SD03溝 | 2.SK05土坑 |
| 図版4 | 1.SK10土坑 | 2.箱崎遺跡第90次調査区西隅 |
| 図版5 | 1.SE01井戸 | 2.SD12溝土層 |
| 図版6 | 1.箱崎遺跡第90次東側調査区 | 2.SD12溝 |
| 図版7 | 1.SK14土坑 | 2.SE13井戸 |
| 図版8 | 1.Pit51 | 2.東壁面土層 |
| 図版9 | 1.SD12溝・SE13井戸 | 2.SE01井戸枠 |
| 図版10 | 1.SK15土坑 | 2.SK16土坑赤色顔料検出状況 |
| 図版11 | 1.SK16土層 | 2.SE01井戸枠 |

本文目次

Iはじめに	
1 調査に至る経緯	5
2 調査の組織	5
II 遺跡の位置	6
III 調査の記録	
1 調査の概要	8
2 遺構と遺物	
(1) 遺構	8
(2) 遺物	11
IV 小結	23

挿図目次

第1図 箱崎遺跡と周辺の遺跡（縮尺1/25000）	6
第2図 箱崎遺跡発掘区域図（縮尺1/8000）	7
第3図 箱崎遺跡第90次調査発掘地（縮尺1/1000）	7
第4図 箱崎遺跡第90次調査遺構配置図（縮尺1/100）	8
第5図 箱崎遺跡第90次調査土層（縮尺1/60）	9
第6図 井戸実測図（縮尺1/60）	9
第7図 土坑実測図（縮尺1/20・1/40）	10
第8図 SE01出土遺物実測図（縮尺1/3）	11
第9図 SK06/07・SE08出土遺物実測図（縮尺1/3）	13
第10図 SD02/03/12出土遺物実測図（縮尺1/3）	14
第11図 SK05/14・I層出土遺物実測図（縮尺1/3）	15
第12図 SD12・SK05・I層出土遺物実測図（縮尺1/3）	17
第13図 Pit出土遺物実測図（縮尺1/3）	18
第14図 東壁3層他出土遺物実測図（縮尺1/3）	19
第15図 出土瓦実測図1（縮尺1/4）	21
第16図 出土瓦実測図2（縮尺1/4）	22
第17図 出土瓦実測図3（縮尺1/4）	23
第18図 出土石製品実測図1（縮尺1/2）	24
第19図 出土石製品実測図2（縮尺1/2）	25
第20図 出土石製品実測図3（縮尺1/2）	26

I はじめに

1 調査に至る経緯

2018（平成30）年2月16日、個人から本市に対して東区馬出5丁目99番（地番）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（29-2-992）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの箱崎遺跡の中央に位置する。現況は駐車場で、埋蔵文化財課がこれを受け、近接地の確認掘調査から遺構面の確認レベルを割り出した。申請者と埋蔵文化財は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積366m²の内掘削による影響が及ぶ217.67m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は翌2018（平成30）年10月1日から11月21日まで行われた。令和元年度に整理に着手、翌令和2年度に報告することとした。

2 調査の組織

発掘調査委託 個人

発掘調査受託 福岡市

発掘調査（平成30年度）

資料整理（令和元・2年度）

福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

課長 大庭 康時

菅波 正人

調査第1係長 吉武 学

吉武 学

事前審査担当 池田 祐司（主任文化財主事） 事前審査担当 田上 勇一郎

中尾 祐太（文化財主事）

朝岡 俊也・山本 晃平

発掘調査

資料整理

佐藤 一郎

佐藤 一郎

調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課の松原加奈枝が行った。

また、準備工担当の生和コーポレーション株式会社、地元馬出5丁目町内、発掘作業員、資料整理補助員の方々のご協力により、箱崎遺跡第90次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

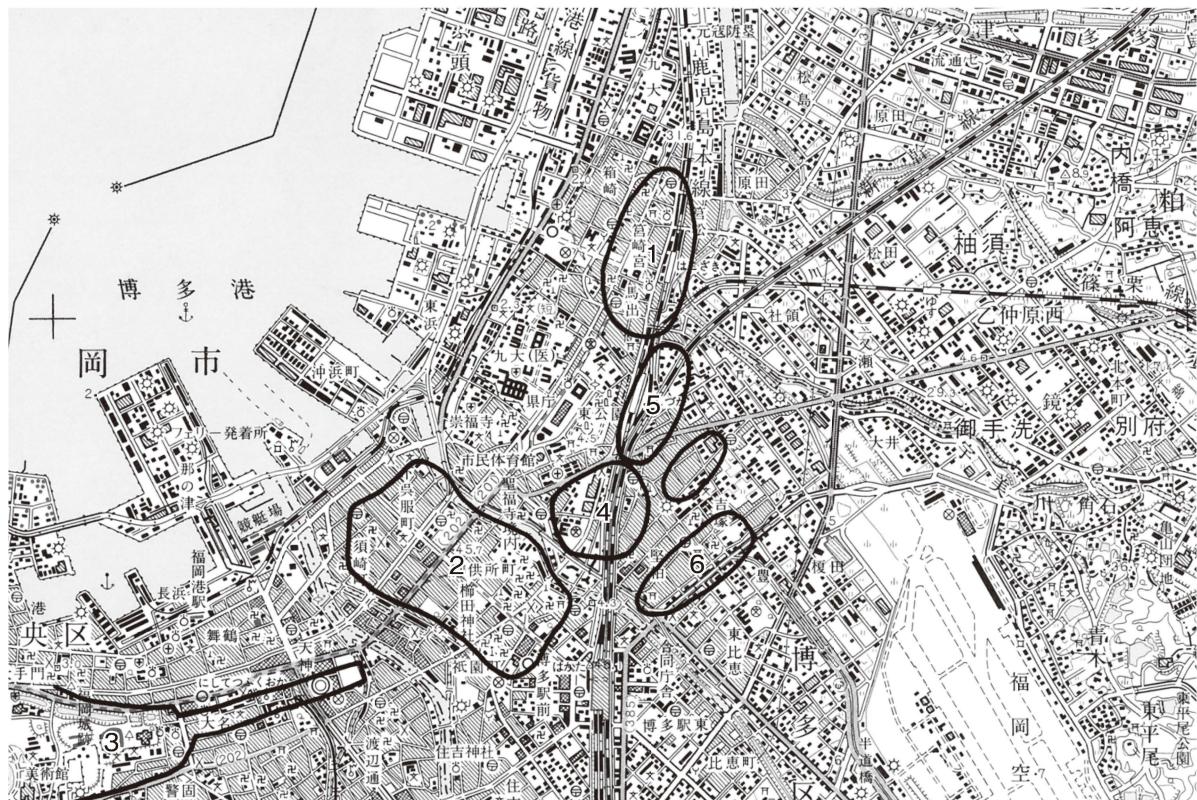
II 遺跡の位置と環境

調査地は箱崎遺跡の南東、第2・第54次調査地の南側に位置する。

箱崎遺跡は福岡平野の東部、多々良川水系の宇美川河口部左岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。式内社筥崎宮境内を中心とする東西0.6km、南北2.2kmの範囲に展開する。西側は博多湾に臨み、東側は宇美川の氾濫により浸食を受けている。砂丘の南端については押さえられていない。標高を下げながら更に伸び南に位置する吉塚本町遺跡へと続く。遺構面は当時の海岸線に沿って帯状に分布する砂丘や砂州でつくられた第四紀層上部の箱崎砂層上面で確認されている。

箱崎遺跡の中心には、筥崎宮が位置する。箱崎遺跡の消長を語る上で、中心となる区域である。『筥崎宮縁起』によると、筥崎宮は延長元年（923）に大分宮（福岡県飯塚市）より遷座したとされる。対外交易に意欲的な大宰府官人の思惑が背景にあったとされる。

筥崎宮の名は『延喜式』神名帳〔延長5年（927）成立〕には八幡大菩薩筥崎宮一座 名神大と見える。



1. 箱崎遺跡
2. 博多遺跡群
3. 福岡城跡・鴻臚館跡
4. 吉塚遺跡
5. 堅粕遺跡
6. 吉塚本町遺跡
7. 比恵遺跡群
8. 那珂遺跡群

第1図 箱崎遺跡と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）

尊名から遷座の初めより神仏習合の形態をとっていたことが察せられる。承平7年（937）『石清水文書』に大宰府、僧兼祐をして、筥崎神宮寺に多宝塔を造立させるとあるが、その所在地は不明である。『今昔物語』二六には、筥崎宮神官を兼ねた大宰府府官秦貞重の宋商との活発なやり取りがみられる。治暦2年（1066）の觀世音寺法華經書写の結縁者、及び康和元年（1099）の大宰權帥大江匡房による觀世音寺五重塔再建計画に見える筥崎の大夫秦則重の祖父に当り、秦氏は大宰府政所官人として世襲化していた。筥崎宮創建から秦貞重らの時代、平安時代中期の遺構は井戸や土坑を主とし、筥崎宮南東部の南北300m、東西100mの範囲に集中している。出土した五代末～北宋初の越州窯青磁、石帶巡方、青銅製権、瓦などから、官衙もしくは官人居住域といった性格を帶びている。

博多・箱崎に宋商人が居留し、活発に日宋貿易が展開されるようになる平安時代後期には、遺構の分布は前段階より倍以上に拡がる。検出された遺構は溝・井戸・土坑・方形竪穴が主たるものである。

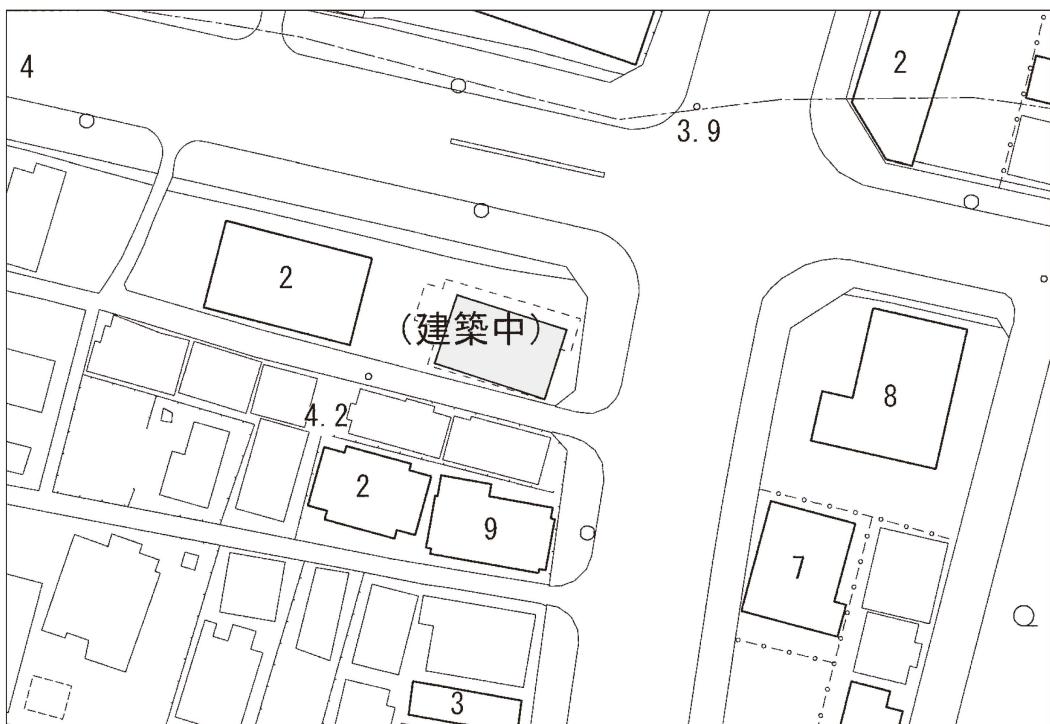
永正6年（1503）筥崎宮は宇佐弥勒寺別宮となるが、箱崎遺跡では11世紀後半～12世紀前半の遺構から、在地の土師器の中に少数の豊前型土師器杯・小皿が出土している例がある。

大治3年（1128）より、宇佐弥勒寺が石清水八幡宮末寺となる。それに伴い筥崎宮も石清水八幡宮の支配下に入る。箱崎遺跡においては、畿内産土器、特に楠葉型瓦器碗の出土量が博多遺跡群とともに、大宰府管内では群れを抜いている。流通した商品というより、人の動きを示す足跡と捉えられている。

出土した瓦器碗は主として畿内から下向する官人や水運関係者の携行品とみられている。京都南部の石清水八幡宮が位置する男山丘陵の西側で多くみられる。箱崎に関しては、下向元のほとんどは石清水八幡宮周辺に絞り込んで良いであろう。他に畿内産土器の東播系須恵器は周辺の農村集落まで捏ね鉢が広く流通しているが、碗は希少なもので、これらも豊前型土師器を含めて流通した商品というより人の動きを示すものであろう。



第2図 箱崎遺跡発掘区域図（縮尺 1/8000）



第3図 箱崎遺跡第90次調査発掘地（縮尺 1/1000）

箱崎遺跡では平安時代後期～鎌倉時代に高台付土師器の小皿、杯に円筒状の脚を付けた高杯が出土している。博多遺跡群ではごく少数だが、式内社が中心に位置する住吉神社遺跡でも出土している。神饌用土師器として、高台が付かない土師器とともに用いられたものとみられる。

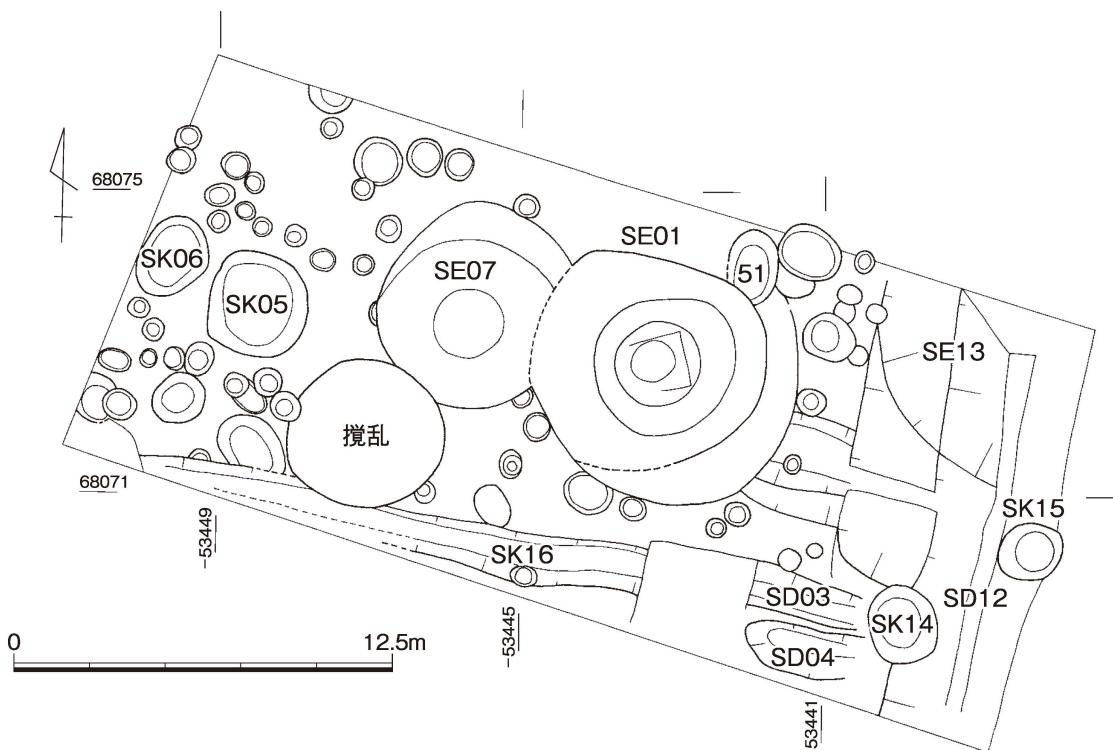
箱崎遺跡は筥崎宮を中心として、權門社寺と密接な関係をもち、対外交易の一大拠点博多を補完する立場にあった。

◇参考文献 川添昭二1970「筥崎の大友・府官研究の一節」『福岡地方史談話会会報』第100号
廣渡正利1999『筥崎宮史』文献出版

III 調査の記録

1 調査の概要

調査区の長軸は周辺の地割と同じく真北から約 21° 東に振れている。調査に先行して調査対象の遺構面までの表土は重機により鋤取り、土砂はダンプトラックで外部に搬出し、以降掘下げで生じた残土は調査区内で処理することとした。調査区を長軸で二分、北東側をI区、南西側をII区とし、二分した調査区と残土置き場を工程の半ばに重機で切り返して調査することとなったが、残土置き場として限界に達した後に調査区の切り返しのために残土の反転を行うこととした。10月3日から作業員を投入し、I区の遺構の検出に当たった。遺構の内訳は11世紀前半からの13世紀後半にかけての溝・井戸・土坑・柱穴・ピット状遺構で、10月16日にI区全景写真撮影、その後遺構の完掘、実測作業を経て、10月22日から残土の反転を行い、II区の調査に着手した。一部に遺物包含層が薄く残っており、上面ではI区と同時期同内容の遺構検出を行った。24日からは調査区東端で検出した溝の東側の肩確認のため、調査区の拡張を手掘りで行った。11月2日にII区全景写真撮影、その後遺構の完掘、記録作成作業を経て、包含層を掘下げ、地山面で土坑など遺構検出に当たった。その後、調査区東壁土層写真撮影、実測作業を経て、11月21日に調査を終了した。



第4図 箱崎遺跡第90次調査遺構配置図（縮尺1/100）

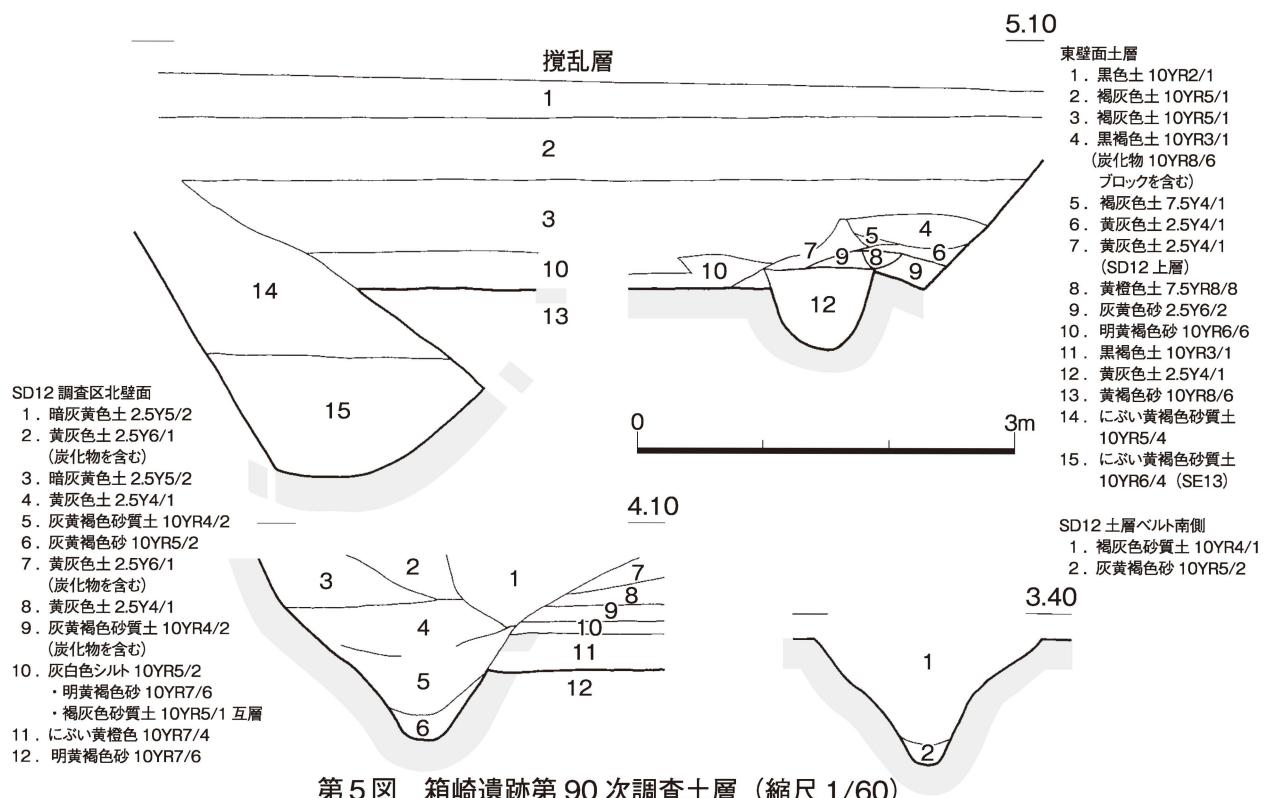
2 遺構と遺物

検出遺構

溝（第5図）

SD12 調査区東端で検出した幅2.7m・深さ1.5mの断面V字の溝で、延長5.8m検出した。SE13井戸・SK15土坑を切る。方位はN-11°-Eに取る。底面の標高は西から東に向けて低くなる。

SD03 調査区南東端で検出した幅0.6m・深さ0.3mの断面逆台形の溝で、東端でSK14・SD12に切られる。延長10m検出した。方位はN-80°-Wに取る。底面の標高は南から北に向けて低くなる。

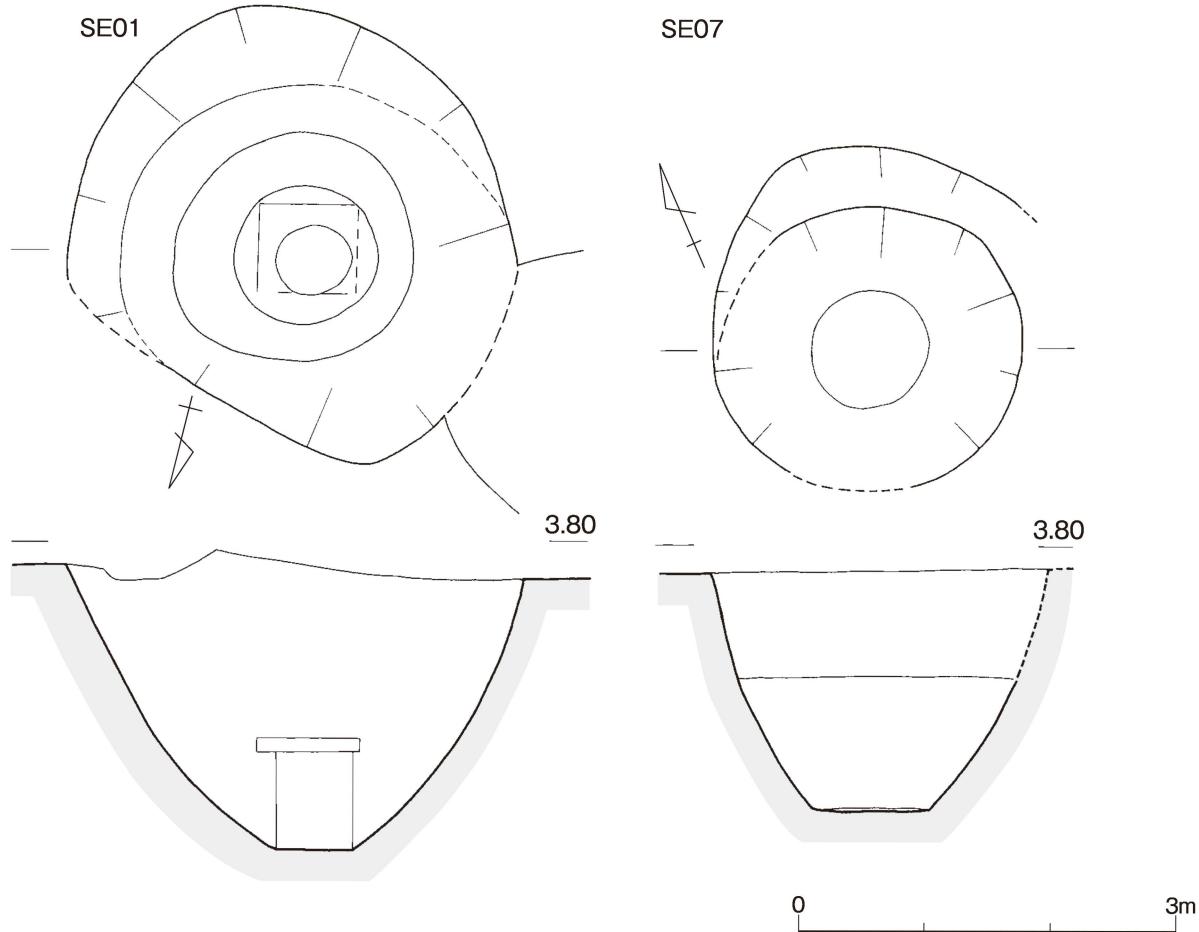


第5図 箱崎遺跡第90次調査土層（縮尺1/60）

井戸（第6図）

SE01 調査区中央で検出した。掘り方の平面形は径3.5～3.7mの不整円形を呈し、深さ2.4mを測る。基底部に一辺0.8m、深さ0.1mの井桁とその下部に径0.6m、深さ0.8の桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.9mを測る。

SE07 調査区中央西でSE01と重複して検出した。掘り方は径2.5～2.8mの不整楕円形を呈し、



第6図 井戸実測図（縮尺1/60）

深さ 1.9m を測る。桶側の痕跡は検出できなかった。底面の標高 1.2m を測る。

SE13 調査区北東端で検出した。遺構の北半が調査区外にかかり、南東は SD12 溝に切られ、1/4 の検出に留まった。安全対策上壁面に法を付けての掘下げとなり、底面には至らなかった。

土坑（第7図）

SK14 調査区南東で検出した。0.9m×1.0m の不整楕円形を呈し、深さ 0.6m を測る。土師器小皿・杯が複数底面から浮いた状態で出土した。

Pit51 調査区北端中央で検出した。0.7m×1.0m の不整楕円形を呈し、深さ 0.95m を測る。口禿白磁皿 1・土師器小皿 2 が底面から 0.3 m 浮いた状態で出土した。

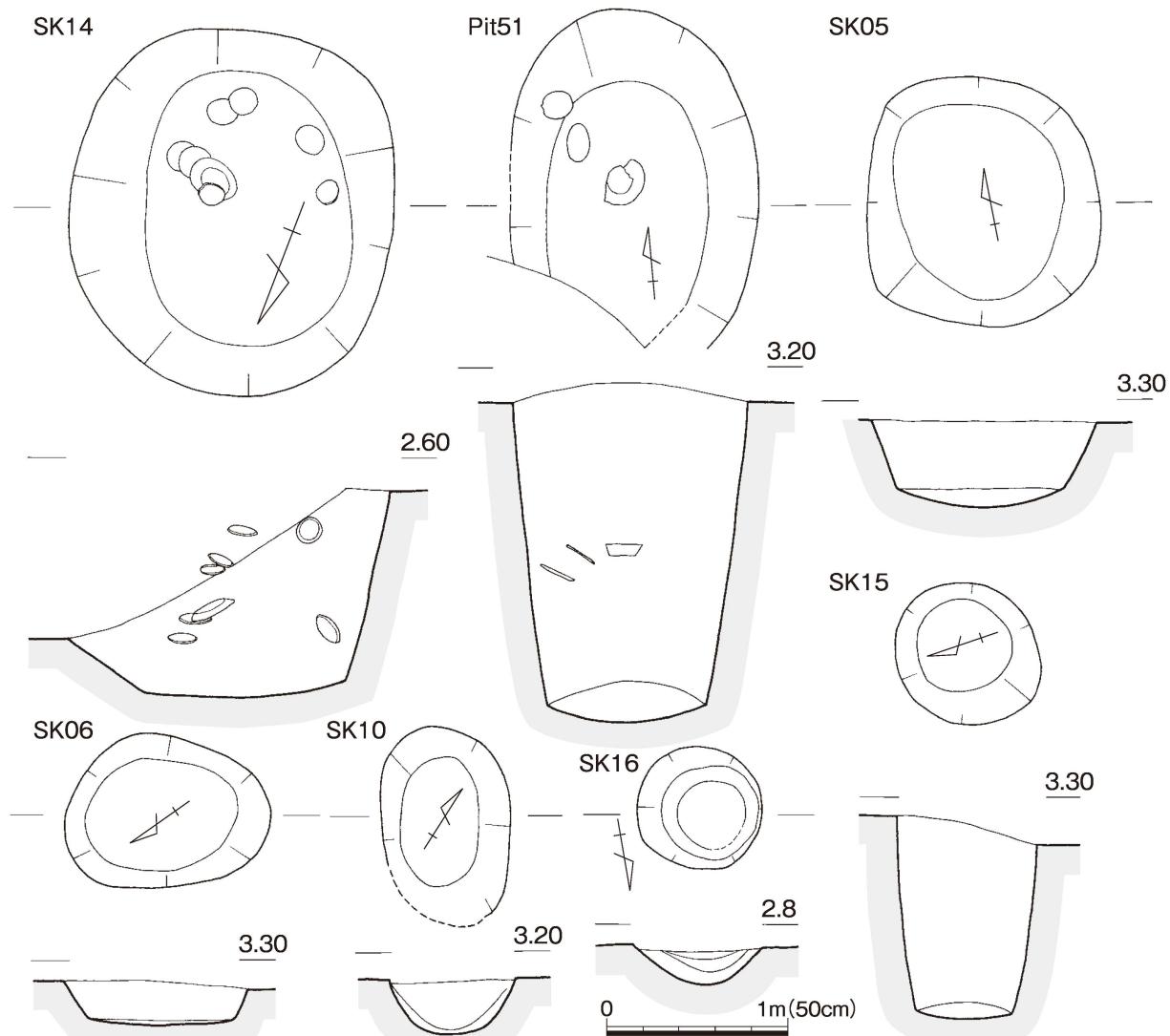
SK05 調査区南西で検出した。1.25m×1.5m の不整円形を呈し、深さ 0.5m を測る。

SK06 調査区南西 SK05 の北西隣で検出した。0.85m×1.1m の不整楕円形、深さ 0.25m を測る。

SK10 調査区南西で検出した。0.7m×1.1m（復元）の不整楕円形を呈し、深さ 0.3m を測る。炭化物を含む黒色砂質土が堆積している。主軸の方位を N-34°-W に取る。

SK15 調査区東端中央で検出した。径 0.8m の不整円形を呈し、深さ 1.1m を測る。

SK16 調査区南端中央で検出した。径 0.7m の不整円形、深さ 0.3m を測る。赤色顔料が堆積する。



第7図 土坑実測図（縮尺SK14, Pit51のみ、1/20 他は1/40）

出土遺物

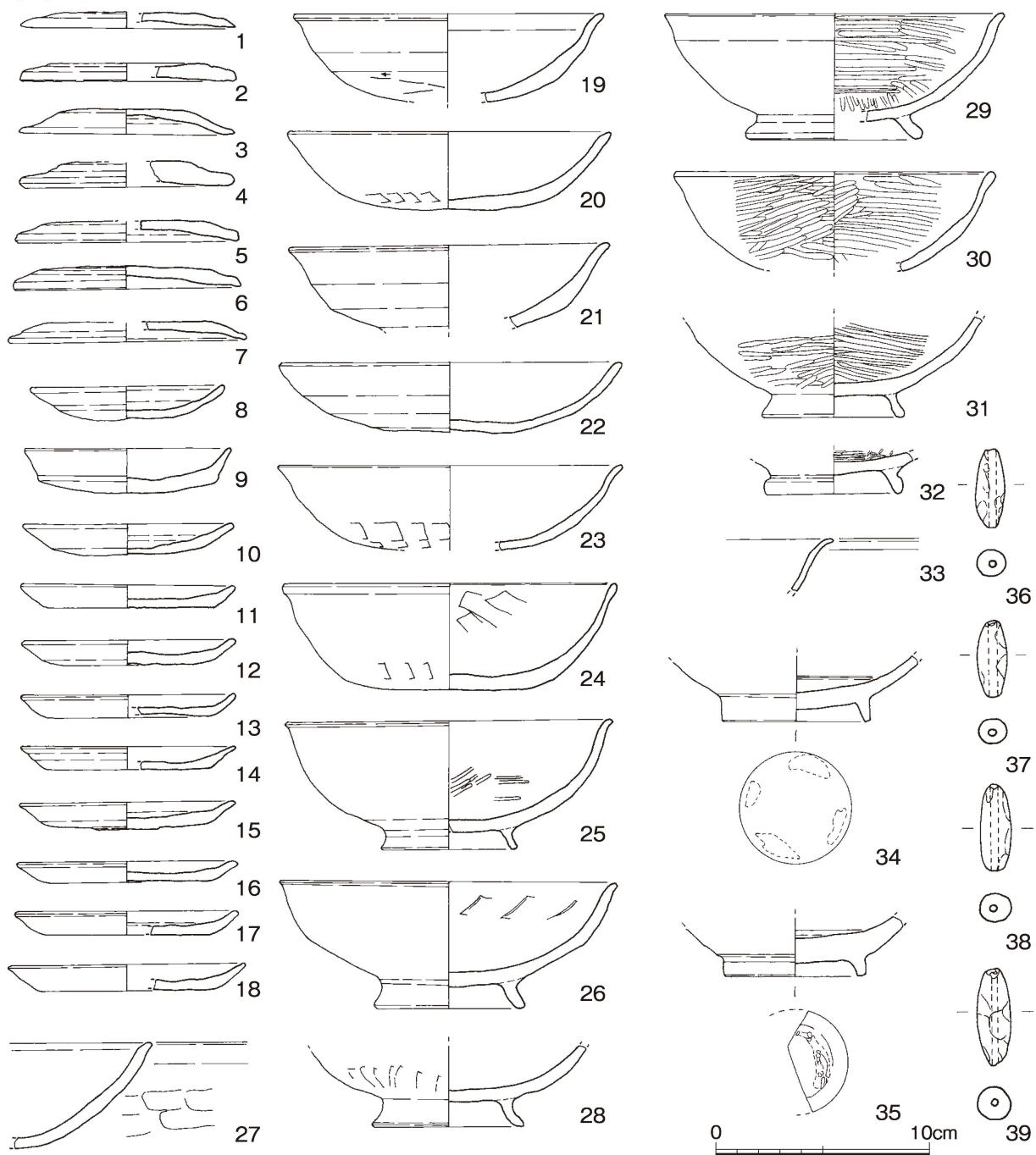
SE01 出土遺物（第8・9図）

土師器

蓋（1～7）天井部外面を平坦にし、口縁端部下面のやや内側に凹線状の窪みをめぐらせる。天井部外面はヘラ切り離し、板状圧痕が残る。体部は回転横ナデ、天井部内面はナデを施す。口径 10.0～11.0cm・器高 0.8～1.2cm を測る。4 は器肉が度を抜いて厚く、他と様相が異なる。

小皿（8～18）底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。8・10は口径 9.0・9.8cm・器高 1.5・1.6cm を測り、口径が他の一群と比べ小さく、器高は高く、丸底を呈する。

SE01



第8図 SE01 出土遺物実測図（縮尺 1/3）

9は口径9.6cm・器高2.1cmを測り、器高が高く、器肉も厚い。11～18は口径10.0～11.0cm・器高1.0～1.2cmを測る扁平な一群である。

丸底杯（19～24）内面を工具により平滑に磨く。体部外面から口縁部内面まで横ナデ、底部はヘラ削りの後ナデを施す。19～23は口径14.4～16.0cm・器高3.3～4.2cmを測る。24は口径15.6cm・器高5.0cmを測る。器高が高く、底部はやや平坦である。

椀（25～28）内面を工具により平滑に磨く。体部外面は横ナデ、底部はヘラ削りの後ナデを施す。

外底に撥高台を貼り付ける。27は口縁部片、28は底部片で、25・26は口径15.2・15.7cm・高台を含めた総高6.0・6.1cmを測る。

黒色土器 梗（29～32）体部は内外面とも横方向にヘラ磨き、高台は横ナデ、外底はナデを施す。30は底部、31は口縁部が欠失し、32は底部片である。

越州窯系青磁碗（33～35）33は端反りの口縁部片、34・35は幅狭の輪状高台を削り出した底部片で、内底見込みの体部との境に沈線状の段がつく。外底高台内に目跡が残る。

土錘（36～3）全長3.6～4.5cm・最大径1.3～1.6cmを測る管状土錘である。

SE01 上面出土遺物 遺構上面には後世の掘り込みによる遺物の混入がみられた。1は土師器杯で、底部は糸切り離し、口径12.7cm・器高2.7cmを測る。2は白磁皿II類、3・5・7は龍泉窯青磁で、3は外面に鎬蓮弁を削り出す小碗、5は口縁部を輪花にする碗、7は外面が無文、内面に劃花文を施す碗底部片である。4は白磁高足杯で、体部外面に櫛による条線を入れる。6は無釉の高麗陶器口縁部片である。

SK06 出土遺物（第9図）

瓦器 梗（8）底部が欠失し、体部は内外面とも横方向にヘラ磨きを施す。

SE07 出土遺物（第9図）

土師器

小皿（9）底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径10.5cm・器高1.3cmを測る。

高台付小皿（10）外底部に貼付した高台の付け根が残る。口径9.8cm・高台を除く器高1.1cmを測る。

椀（14）撥高台を貼り付けた椀底部片で、高台は横ナデ、その他の部位はナデを施す。

甕（11）短く折り曲げた口縁部片で、端部を丸くおさめる。僅かに残る体部内面上位をヘラ削り、その他の部位は横ナデを施す。

鍋（12）鍔を貼付しL字となす口縁部片で、上位は横ナデ、内面は不定方向のナデを施す。

黒色土器 梗（15～18）15・16は底部が欠失し、体部は内外面とも横方向にヘラ磨きを施す。17・18は底部片で、内面はヘラ磨き、高台は横ナデ、外底はナデを施す。

白磁碗（13）断面逆台形高台を浅く削り出した底部片で、底部は薄く、内底見込みの体部との境に沈線状の段がつく。

SE08 出土遺物（第9図）SE01外側の井戸とみられたが、完掘の結果、SE01掘方の一部と判明した。

土師器 高台付小皿（19）外底に撥高台を貼り付ける。口径10.0cm・高台を含めた総高2.0cmを測る。

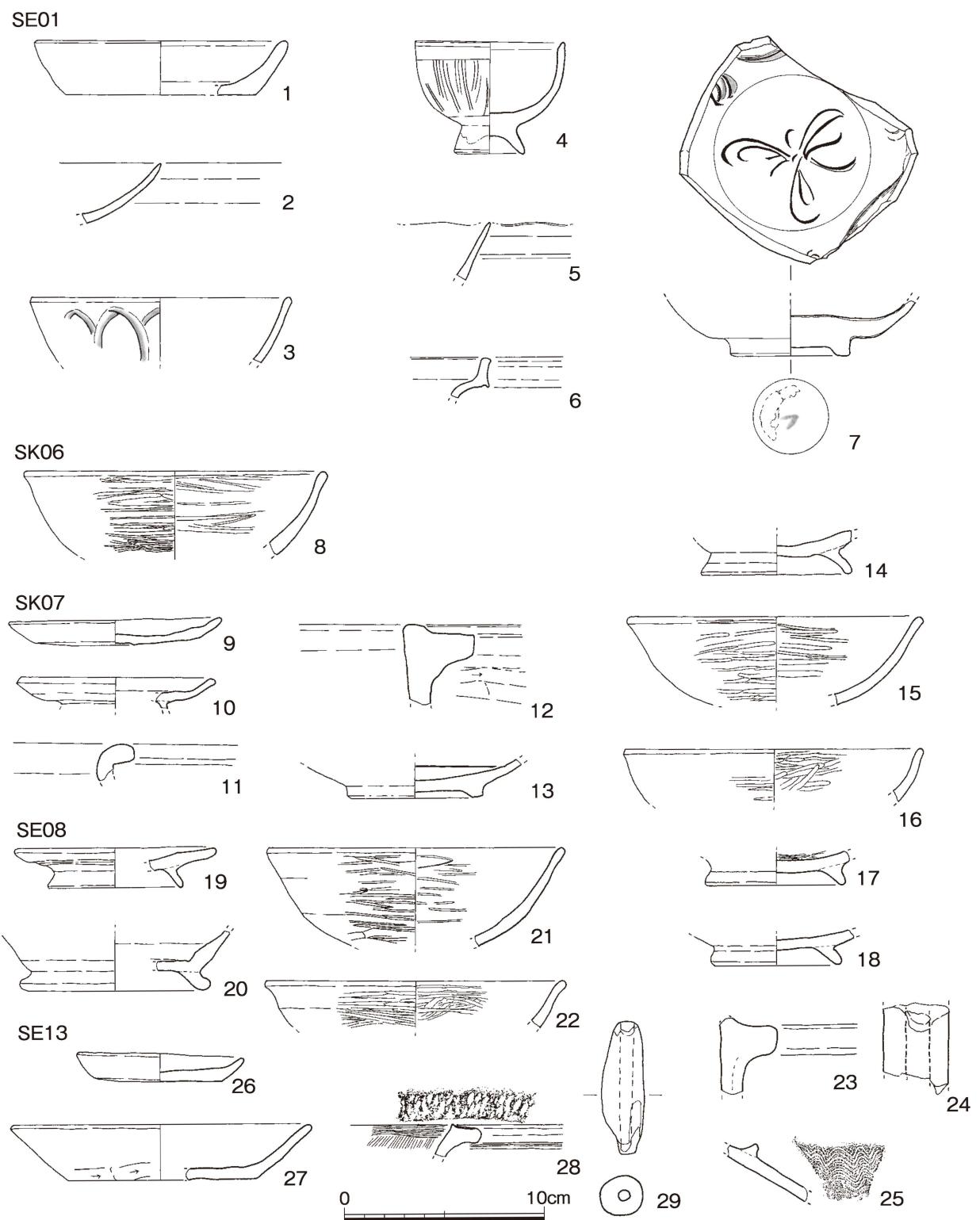
高台付杯（20）体部と底部の境は明瞭に屈曲する。底部端に撥高台を貼り付ける。口縁部と底部中央が欠失している。体部内外面・内底部・高台とも横ナデを施す。

鍋（23）鍔を貼付しL字となす口縁部片で、残存する部位はすべて横ナデを施す。

黒色土器 梗（21・22）底部は欠失し、体部は内外面とも横方向にヘラ磨きを施す。

土錘（24）両端が欠失し、径3.2cmの管状土錘である。

弥生土器 壺（25）頸部との境に断面三角形の突帯、その下位に波状文をめぐらせる肩部片である。



第9図 SK06/07・SE08 出土遺物実測図（縮尺 1/3）

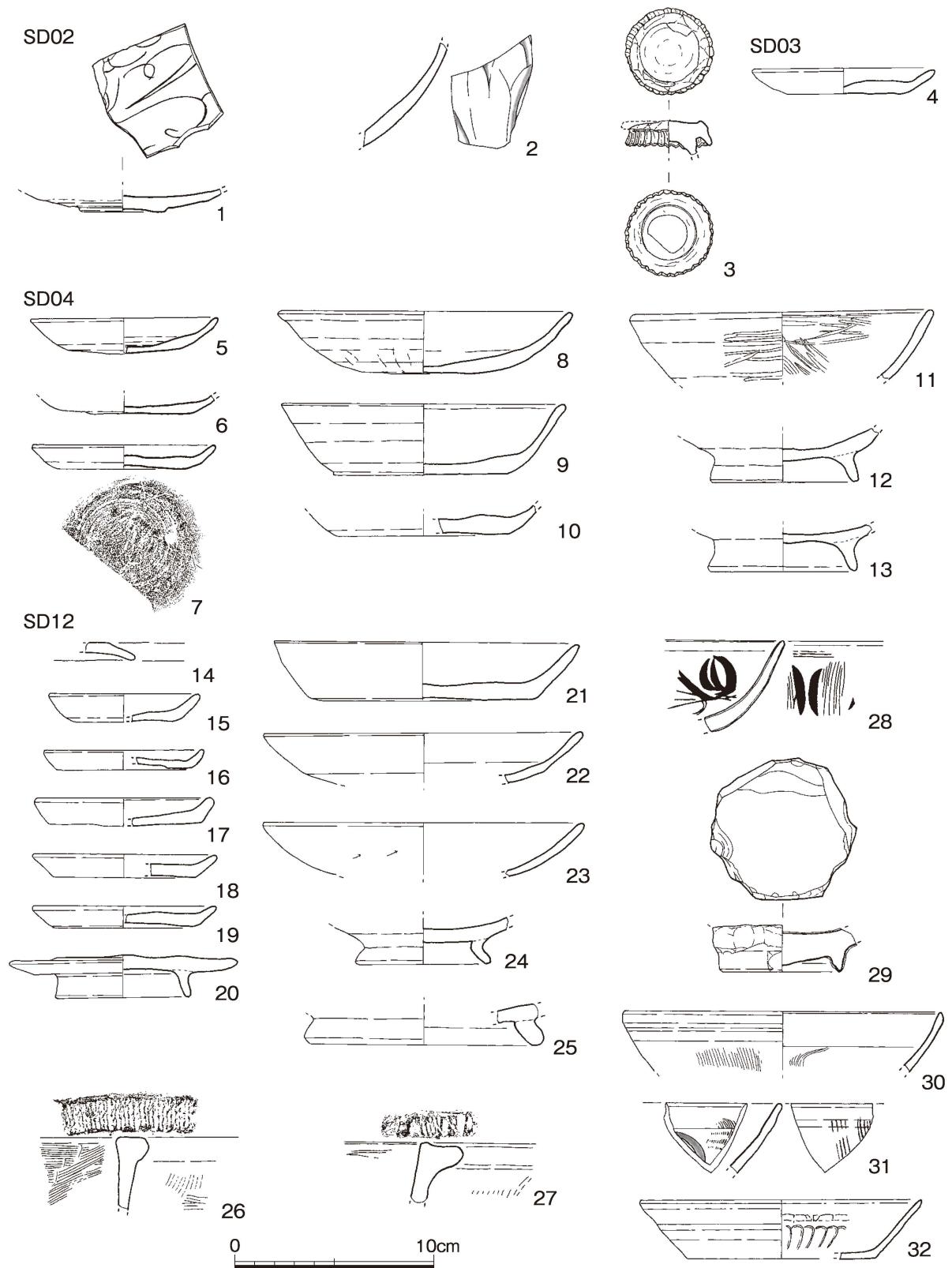
SE13 出土遺物（第9図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿（26）口径 8.3cm・器高 1.4cm を測る。

杯（27）体部外面下位の底部付近には削り痕がみられる。口径 15.0cm・器高 2.8cm を測る。

鍋（28）L字口縁部の上面に簾状圧痕が残る。外面は口縁部から体部上位にかけて横ナデ、内面は口縁部直下に横方向のハケ目を施す。

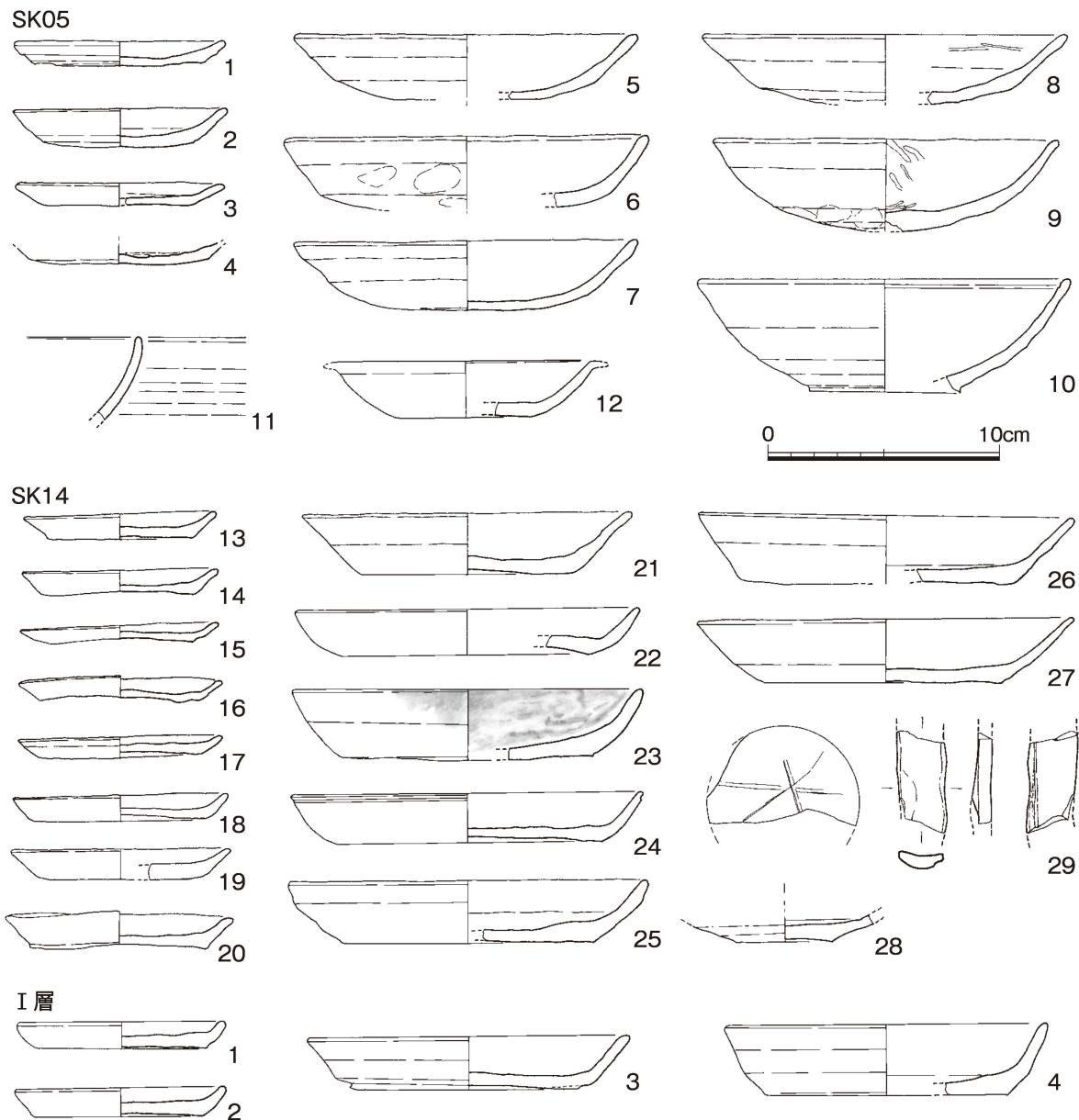


第10図 SD02/03/12出土遺物実測図（縮尺1/3）

土錐（29）一端が欠損し、全長6.6cm以上・最大径2.2cmの管状土錐である。

SD02出土遺物（第10図）

1は平坦な内底に花文をヘラ彫りする白磁皿底部片、2は外面に鎧蓮弁を削り出す龍泉窯系青磁碗体部片、3は青白磁香炉の杯と脚部の付け根部分で、反花の蓮弁をめぐらせる。



第 11 図 SK05/14・I 層出土遺物実測図（縮尺 1/3）

SD03 出土遺物（第 10 図）

4 は土師器小皿で、底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径 9.1cm・器高 1.3cm を測る。

SD04 出土遺物（第 10 図）

土師器 小皿・杯 9・10 の底部は糸切り離し、8 は不明である。体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

小皿（5～7）5・7 は口径 9.4・9.2cm、器高 1.8・1.2cm を測る、7 は外底に線刻がある。6 は口縁部が欠失する。

杯（8～10）8 は下半に指頭圧痕が残る。8・9 は口径 14.7・14.1cm、器高 3.2・3.6cm を測り、10 は口縁部が欠失する。

椀（12・13）撥高台を貼り付けた椀底部片で、高台は横ナデ、その他の部位はナデを施す。

瓦器 碗（11）底部が欠失し、体部は内外面ともヘラ磨きを施す。

SD12 出土遺物（第 10・12 図）

土師器

蓋 (14) 天井部外面を平坦にし、口縁端は直線的に延びる。天井部外面はヘラ削り、体部は回転横ナデ、天井部内面はナデを施す。中心部が欠失する小片で法量の復元はできない。

小皿 (15～19) 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.6～9.2cm・器高 1.0～1.4cm を測る。

托 (20) 口縁部が水平に延び、体部を含め円盤状を呈する。底部はヘラ切り離し、体部から外に開く高台を貼り付けた底部まで回転横ナデ、内底はナデを施す。口径 11.4cm、器高 2.2cm を測る。

杯 (21～23) 21 の底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径 15.2cm・器高 3.0cm を測る。22・23 は底部が欠失し、器表は摩滅している。丸底杯か。

椀 (24・25) 撥高台を貼り付けた椀底部片で、高台は横ナデ、その他の部位はナデを施す。

鍋 (26・27) L字口縁部の上面に簾状圧痕が残る。外面は口縁部が横ナデ、内面は口縁部直下に横方向のハケ目、体部上位は縦方向のハケ目を施す。

青磁 碗 (28～31) 28・29 は龍泉窯系で、28 は外面に蓮弁を片彫り、櫛目を縦に入れ、内面は蓮華切枝文を片彫りする口縁部片、29 は体部と底部の境を打ち欠き瓦玉状にした底部片である。全面施釉の後、外底の釉を輪剥ぎする。30・31 は同安窯系で、外面に櫛による条線、内面にはヘラと櫛による文様を施すIII-1・b 口縁部片である。

青白磁 皿 (32) 内面に型押しによる花弁文を施す。全面施釉後、口縁端部の釉を掻き取る。

以下、第 12 図参照

土師器 鍋 (1・2) 口縁がゆるく折れ、外面の屈曲部に指頭圧痕が残る。内面は横方向のハケ目、外面は 1 がナデ、2 は斜め方向のハケ目を施す。

すり鉢 (3) 内面に 4 本単位のすり目を入れる。

瓦質土器 火鉢 (4・5) 口縁部片で、外面に 4 は雷文、5 は七宝文のスタンプを入れる。

土製品 6～9 は管状土錘、10 は瓦玉である。

以下、平安中期以前の混入品である。10 は土師器高杯の杯部、11 は黒色土器椀で高台は欠失する。12 は弥生土器甕口縁部片、13 は土師器椀底部片である。

SK05 出土遺物（第 11・12 図）

土師器 小皿(1～4) 底部切り離しは 1・2・4 がヘラ、3 は糸による。体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。1～3 は口径 8.3cm・器高 1.4cm を測る。4 は口縁部が欠失する。

丸底杯(5～9) 内面を工具により平滑に磨く。体部外面は横ナデ、底部との境には指頭圧痕が残る。底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。口径 14.8～15.6cm・器高 3.0～4.0cm を測る。

須恵器 碗 (10) 東播系須恵器で、丸みをもつ体部から、直線的に口縁部が延びる。口縁端部内面に沈線が付く。底部は欠失しているが、平底とみられる。

白磁 11 はやや内湾する直口縁の碗 II-4、12 は口縁端部を水平に引き出す平底皿である。

鉄鎌（第 12 図 14）刃部から茎まで残存長 24cm で、その中間で折り曲げている。

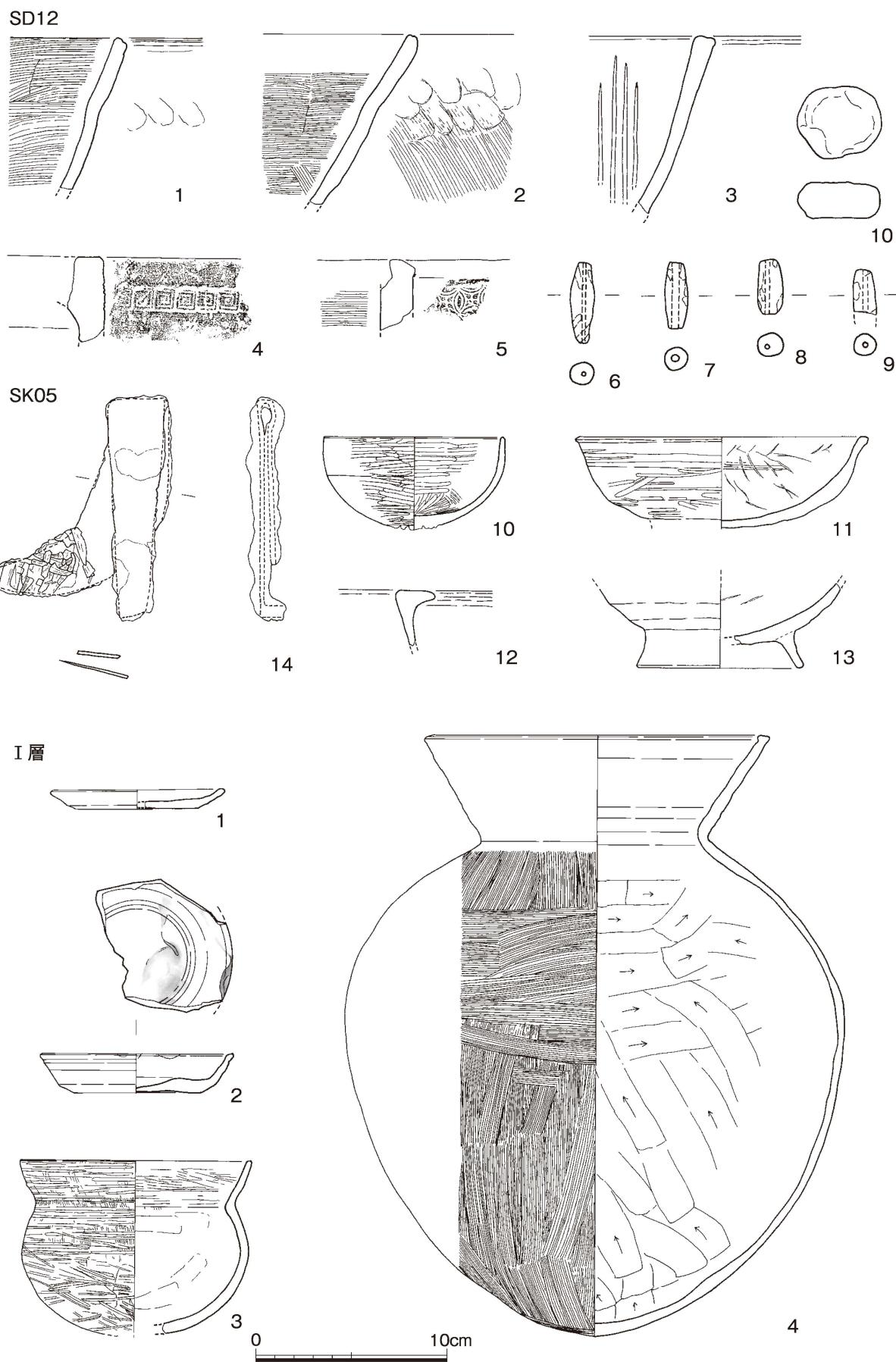
SK14 出土遺物（第 11 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。

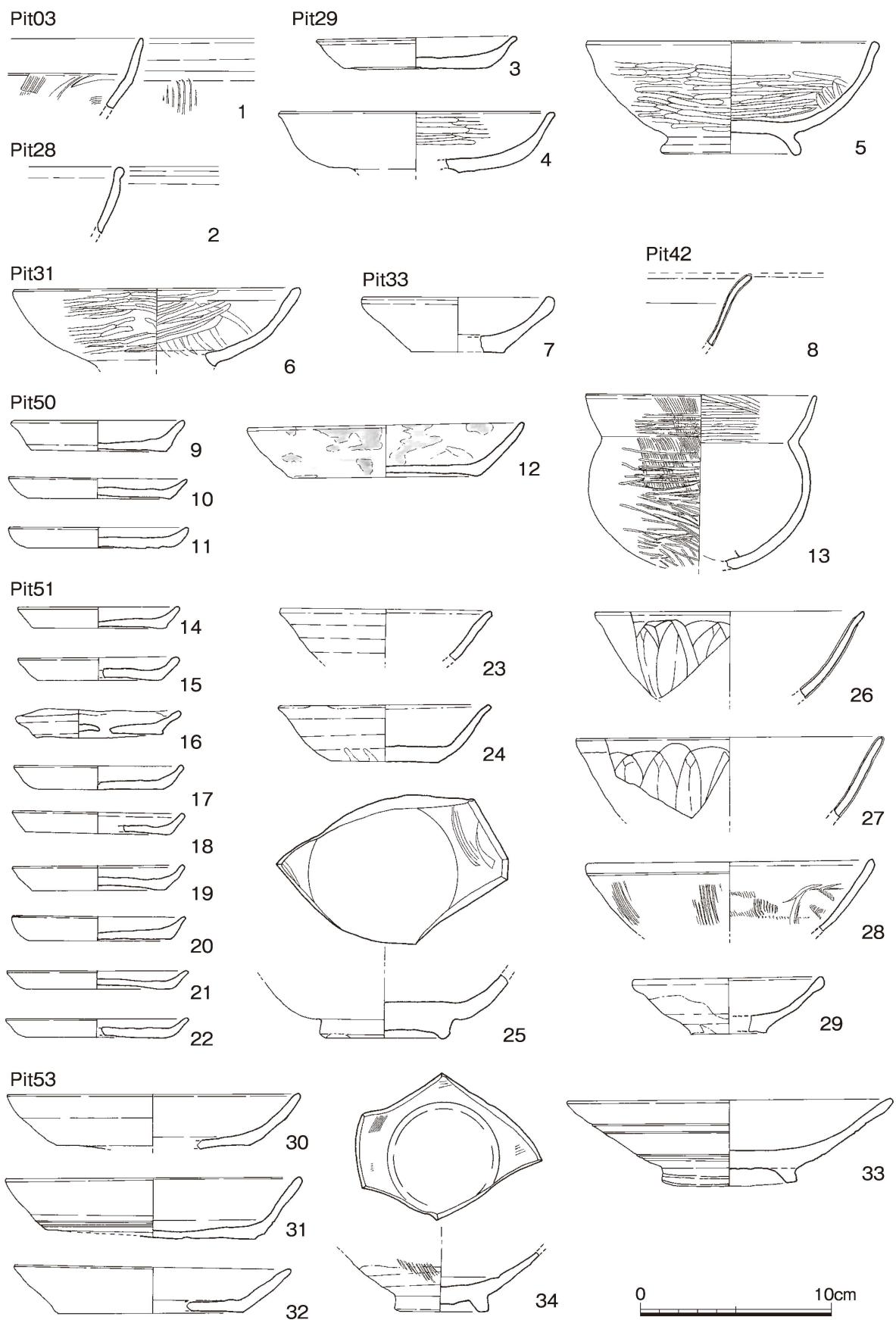
小皿 (13～20) 口径 8.3～9.8cm、器高 0.9～1.4cm を測る。

杯 (21～27) 口径 14.2～16.2cm、器高 2.0～3.0cm を測る。23 は内面と外底に煤が付着する。

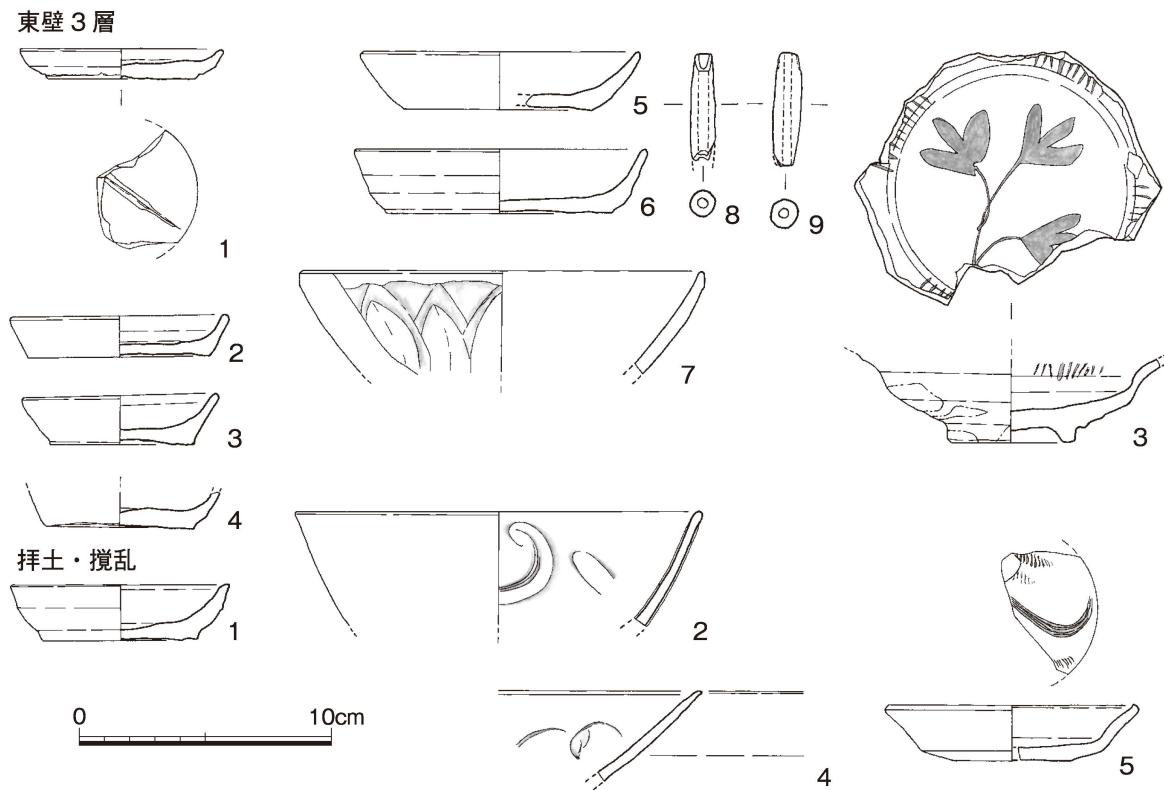
白磁 28 は皿VI-1・b 底部片で、内面に文様をヘラ彫りする。29 は水注把手である。



第12図 SD12・SK05・I層出土遺物実測図（縮尺1/3）



第13図 Pit出土遺物実測図（縮尺1/3）



第14図 東壁3層他出土遺物実測図（縮尺1/3）

I層出土遺物（第11・12図）

1・2は底部ヘラ切り離しの土師器小皿、3は土師器壺、4は土師器甕で、Pit60出土片と接合した。

Pit出土遺物（第13図）

Pit03 1は同安窯系青磁碗I-1・b口縁部片、Pit28 2は白磁碗口縁部片である。Pit29 土師器小皿（3）底部はヘラ切り、口径10.4cm、器高1.6cmを測る。高台付杯（4）体部外面は横ナデ、内面はヘラ磨き、貼付された高台は剥離し欠失する。黒色土器椀（5）体部は丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。体部は内外面とも横方向にヘラ磨きを施す。Pit31 瓦器浅椀（6）体部は外面が横方向、内面は上半が横方向、下半がジグザグのヘラ磨きを施す。高台は欠失する。Pit33 7は陶器小皿、Pit42 8は口禿の白磁碗IX類である。Pit50 土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（9～11）口径9.0～9.4cm、器高1.1～1.6cmを測る。杯（12）口径2.8cm、器高14.4cmを測る。13は古式土師器壺である。

Pit51 土師器小皿（14～22）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径8.4～9.5cm、器高1.1～1.3cmを測る。16は底部中心に穿孔がある。白磁皿（23・24）は口禿の皿IX-1・cである。青磁碗（25～28）25～27は龍泉窯系、25はI-2底部片、26・27は鎬蓮弁碗、28は同安窯系I-1・b口縁部片である。29は陶器小皿である。

Pit53 土師器杯（30～32）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径15.2～15.4cm、器高2.4～3.1cmを測る。高台付杯（33）体部外面は横ナデ、内面は平滑に仕上げる。外底にやや外に開く高台を貼り付ける。口径17.0cm、器高4.6cmを測る。青磁碗（34）同安窯系I-1・b底部片である。

東壁3層出土遺物（第14図）

土師器 底部は糸切り離しによる。1～4は小皿で、1・3・4の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。2は体部外面から内底まで回転横ナデされる。4は口縁部が欠失する。5・

6は杯で、体部外面から内底まで回転横ナデされる。口径 11.0・11.5cm、器高 2.3・2.6cm を測る。

7は龍泉窯系青磁鎧蓮弁碗口縁部片、8・9は管状土錐である。

排土・攪乱出土遺物（第 14 図）

1・2は排土出土、1は体部外面から内底まで回転横ナデされる底部糸切りの土師器小皿、2は龍泉窯青磁碗 I-2 口縁部片、3は表土出土、内面に鉄絵を施す肥前陶器向付で、口縁部が欠失している。4は K-02 出土、青白磁碗、5は K-04 出土、同安窯系青磁皿 I-2 である。

瓦類（第 15～17 図）

SE01 平瓦（1～7）凸面は斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。1は接合した瓦当の剥離痕がみられる。丸瓦（8～10）凸面は斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。8・10・12には、円筒を 2 分割した際の内側からの切込み痕と破面が残る。

SK04 平瓦（11）凸面は斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。丸瓦（12）凸面は斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。円筒を 2 分割した際の内側からの切込み痕と破面が残る。

SK07 軒平瓦（13）斜格子軒平瓦で、中区の二重斜格子、下外区の鋸葉文部分のみ残る。平瓦（14）凸面は斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。丸瓦（15・16）17は玉縁の基部で、凸面は斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。

SE08 平瓦（17・18）凹面に布目、凸面は 15 が斜格子、16 は格子叩き痕が残る。

SD12 平瓦（19・20）小片で詳細は不明であるが、糊圧痕が残る。

丸瓦（21）凸面は二重斜格子叩き、凹面には布目痕が残る。埠（22）表面はヘラナデ調整がなされ、残存する長さ 12.5cm、残存幅 10.2cm、厚さ 4.30m を測る。

Pit51 平瓦（23）・Pit58 平瓦（24）凸面は格子叩き、凹面には布目痕が残り、凸面の端部側は叩きをナデ消す。

I 層 平瓦（25）凸面は格子叩き、凹面には糊の圧痕が残る。丸瓦（26）玉縁部片で、凸面はナデ、凹面には布目痕が残る。

I 層上面 平瓦（27・28）凸面は格子叩き、凹面には布目痕が残り、28 の凸面は一部をナデ消す。

東壁 2・3 層 平瓦（29）凸面は繩目叩き、凹面には糊の圧痕が残る。

石製品（第 18～20 図）

SE01 砥石（1・2）1は三面を研ぎ面として利用している。2は側端の一方が欠損している。二面の研ぎ面が残る。滑石製石鍋（3）体部と底部の境付近の破片である。

SE13 滑石製品（4・5）石鍋片の再加工品で、4 は 2.3×2.5cm の断面隅丸方形の棒状を呈し、両端は欠失している。元の石鍋内面に当たる面に穴が 3 ヶ所配されている。5 は縦耳が付く石鍋片を方形に再加工したもので、側縁の片方には石鍋の口縁端部の平坦面が残る。

SK06 滑石製石鍋（6）内湾する口縁部の端部付近の破片

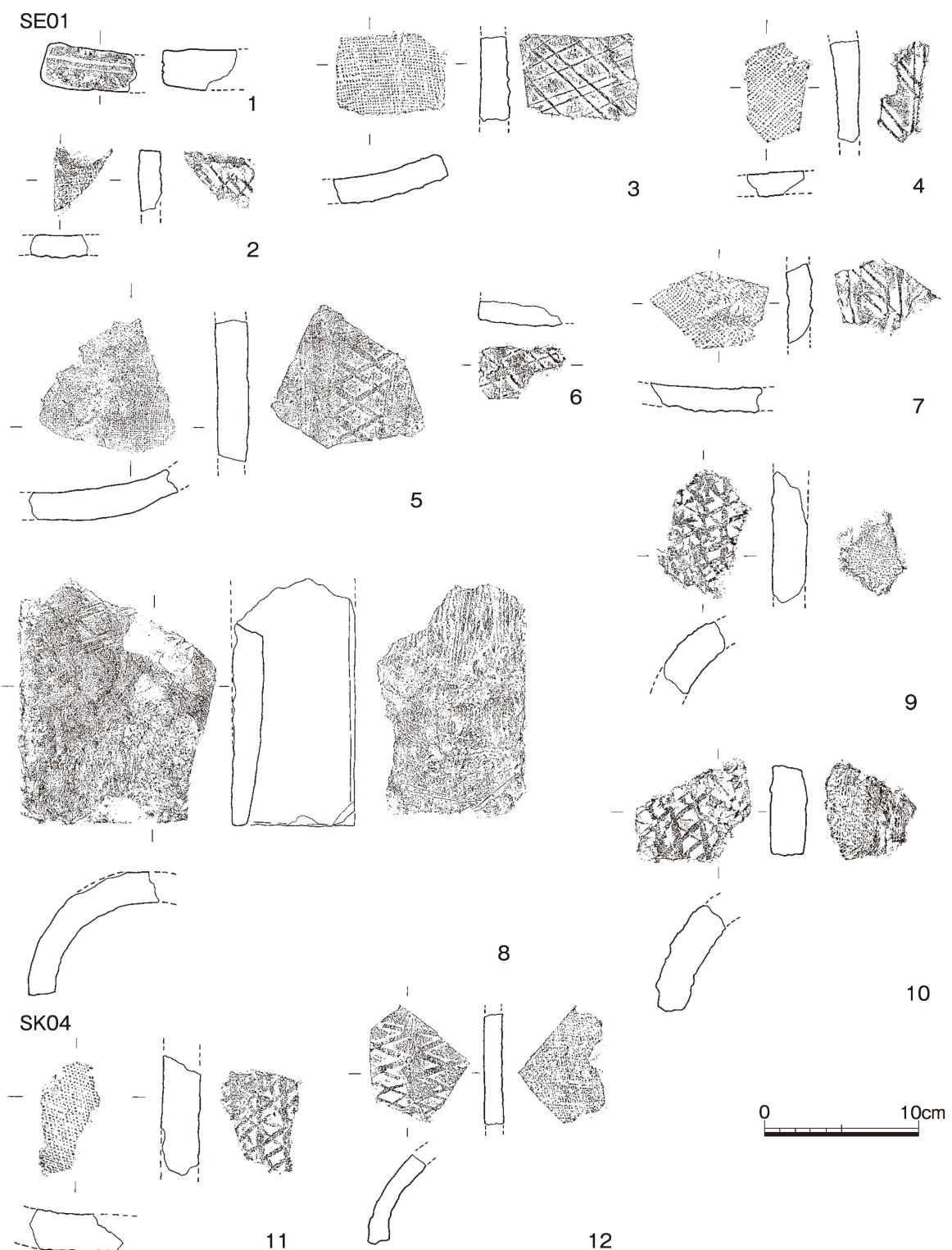
SK07 滑石製石鍋（7・8）7 は縦耳、8 は体部と底部の境付近の破片である。

SD02 滑石製品（9・10）9 は縦耳付の石鍋片を方形に再加工したもので、10 は中心に穿孔がある不整な円盤状石製品である。

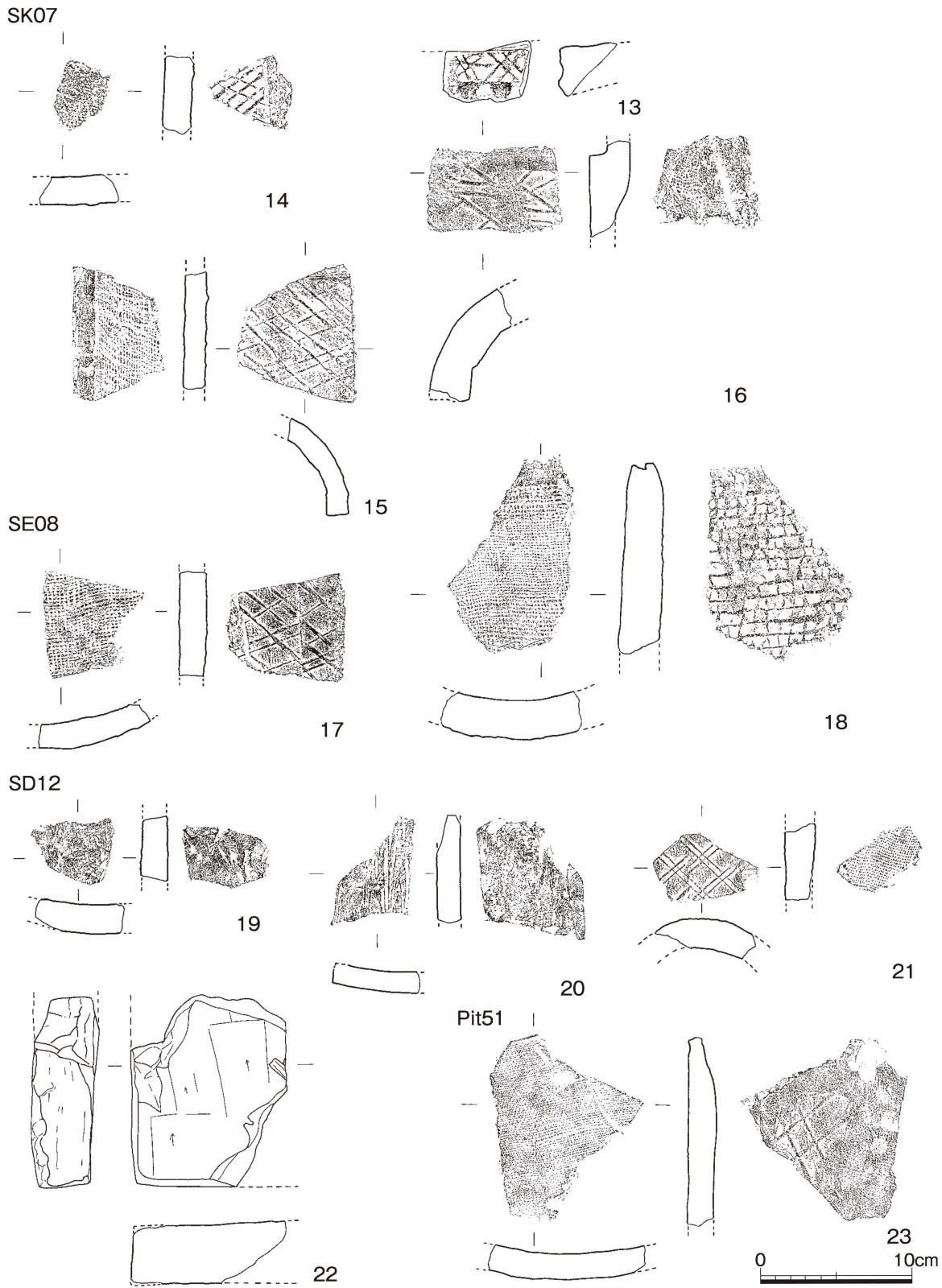
SD12 滑石製品（11～13）石鍋片を再加工したものである。11 は方形の石錐で、両側縁に切込みが入る。12 は鍔がめぐる口縁部片を再加工したスタンプで、鍔と直交して穿孔される。印面には草花文が刻まれている。投弾（14）表面を打ち欠き、直径 3.0cm 前後の球形にする。

Pit51 砥石（15）四面とも研ぎ面として利用している。

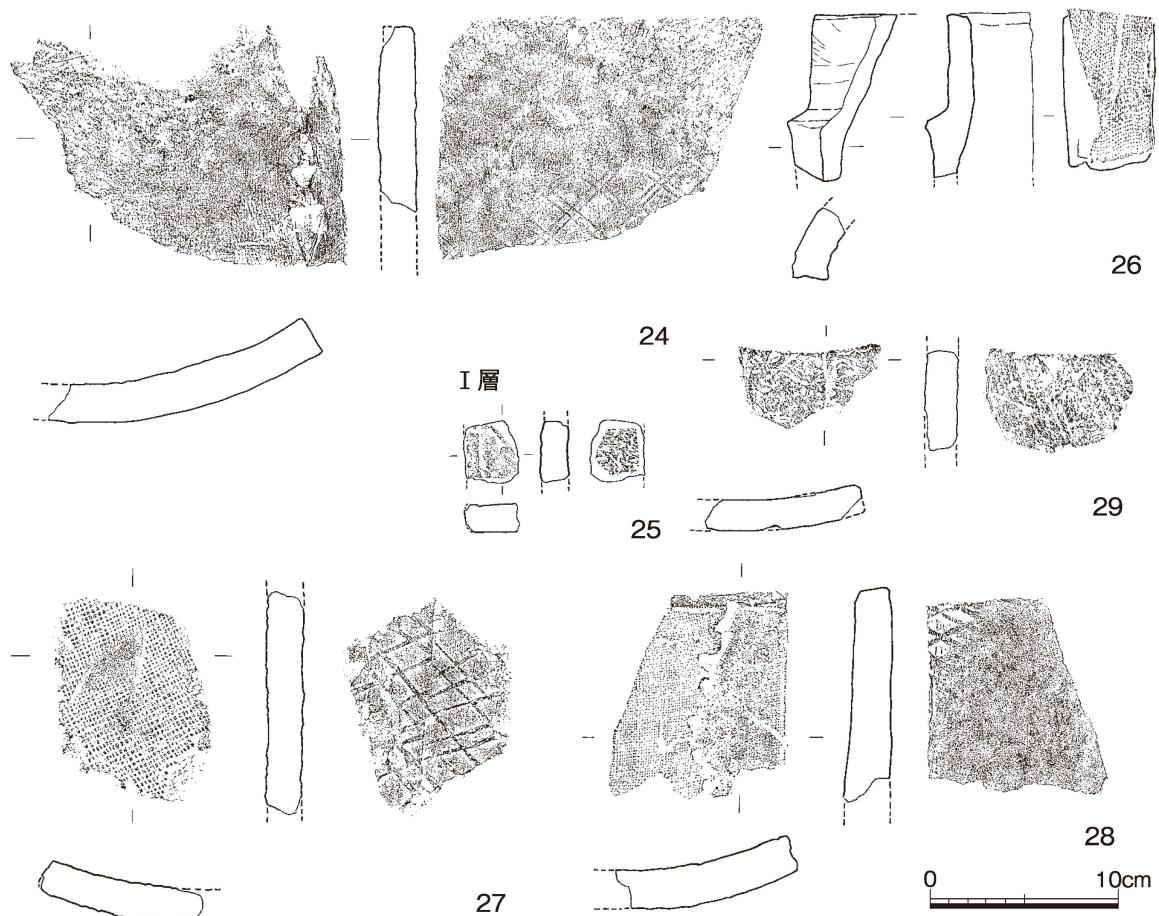
I 層上面 滑石製品（16）石鍋片を再加工し、平面形を橢円形、側面は凸形に成形する破片である。



第15図 出土瓦実測図1（縮尺1/4）



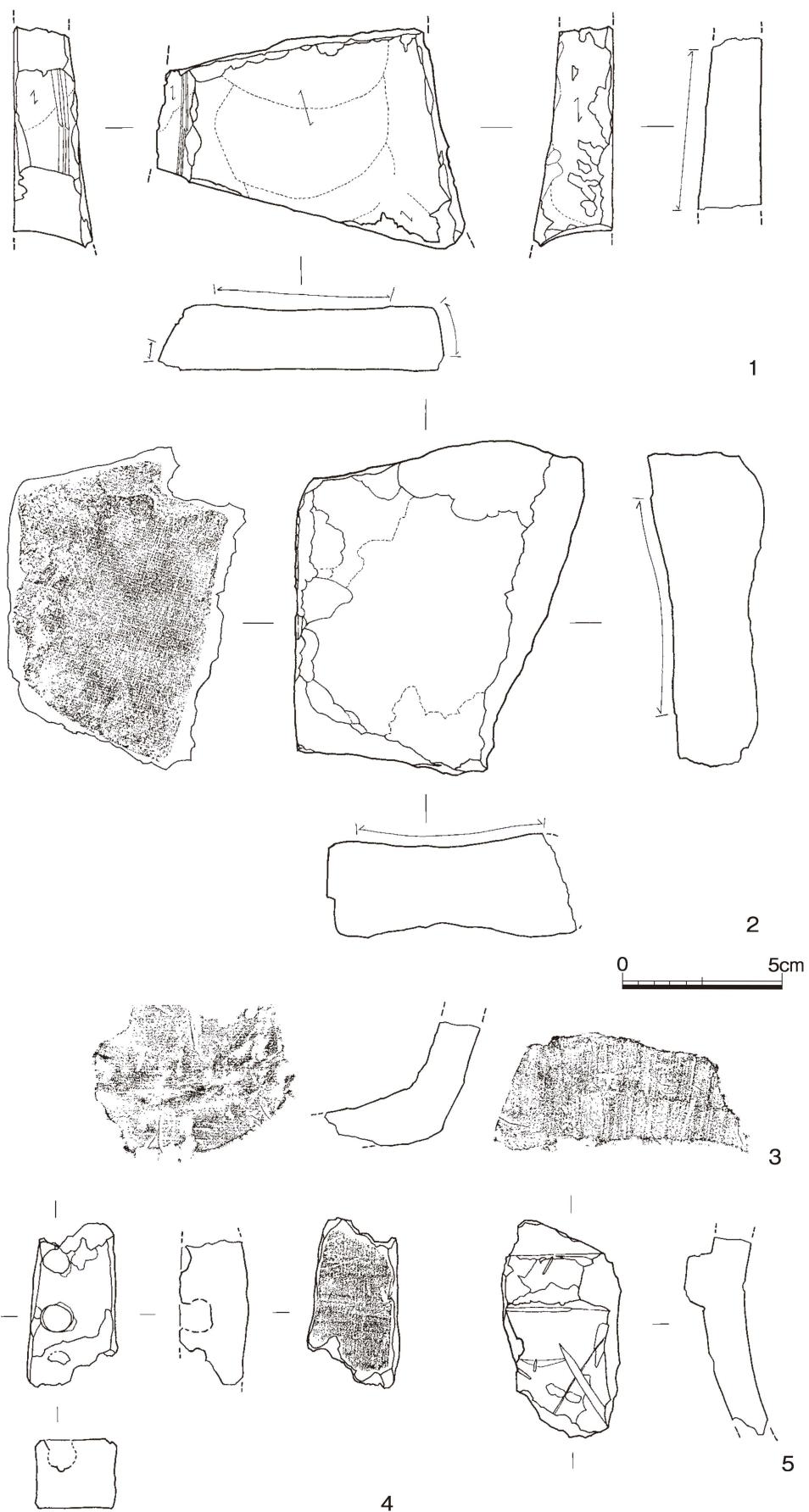
第16図 出土瓦実測図2（縮尺1/4）



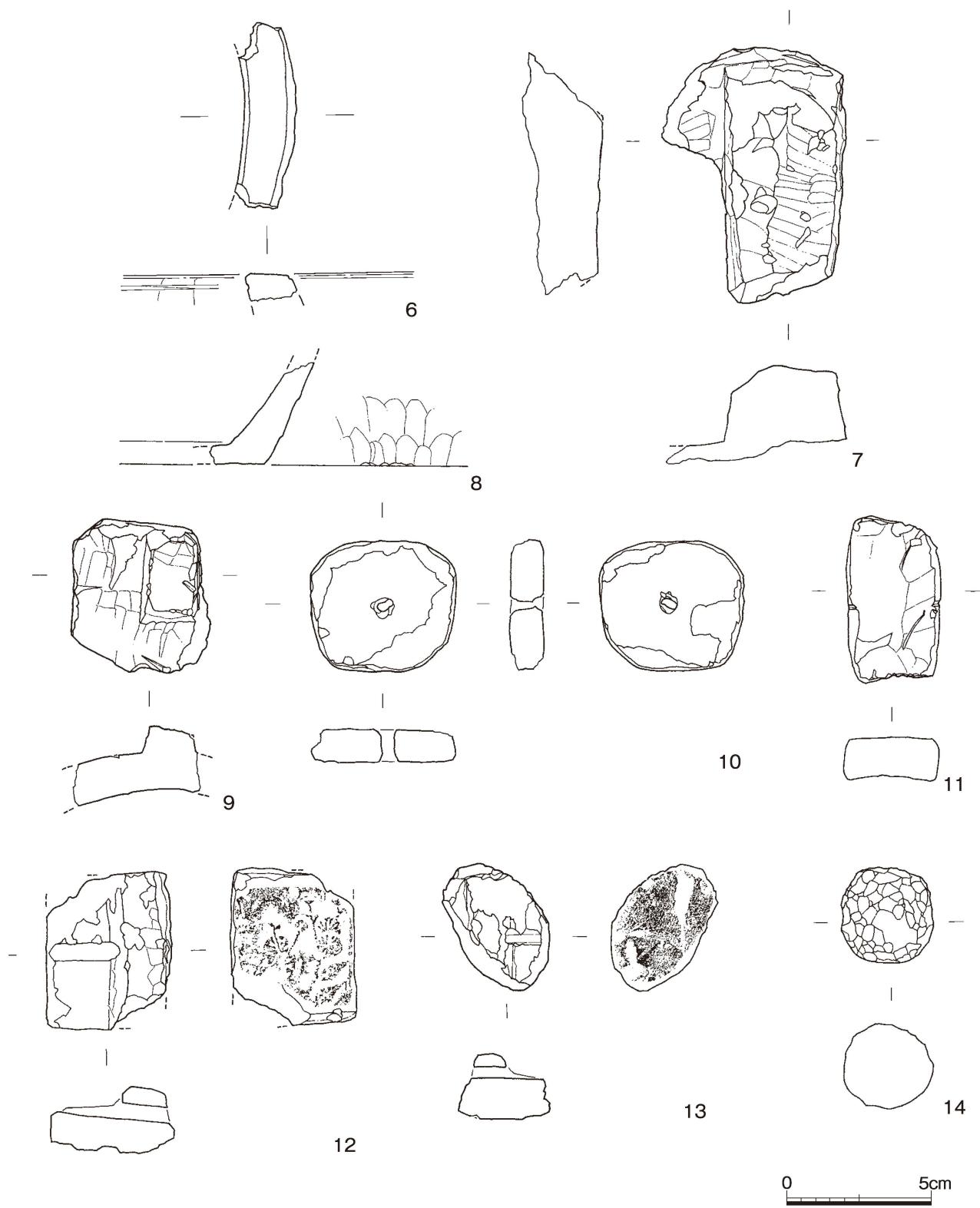
第 17 図 出土瓦実測図 3 (縮尺 1/4)

IV 小 結

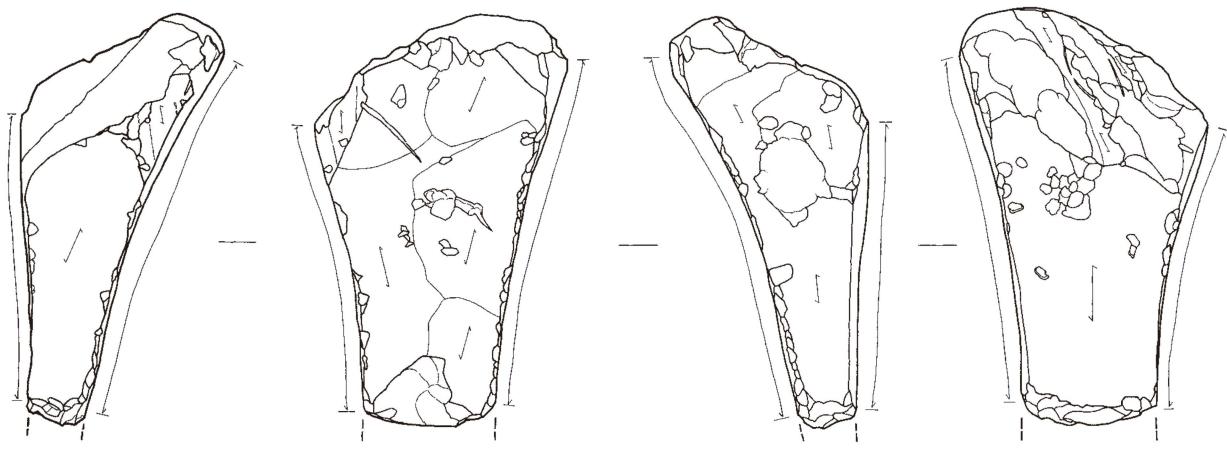
標高3.0m前後の黄灰色砂上面で検出した遺構は11世紀前半の井戸2基・溝2条、調査区南東で検出した溝SD03/04は幅0.5mの平行する東西溝で、SD03は延長12m検出した。土坑は12世紀前半と12世紀後半のものを検出した。調査区北東端で12c後半の井戸SE13、東端で15世紀前半の幅1.8m、断面V字の南北溝SD12を延長5m検出した。柱穴・ピット状遺構は古墳時代前期、11c前半から13c後半にかけてのものを40個検出した。黄灰色下面からは時期不明の炭化物が充満する土坑1・覆土に赤色顔料を含む土坑1・溝状遺構1を検出した。11世紀前半の井戸SE01/07からは黒色土器碗・土師器杯・白磁碗片・越州窯青磁碗片、斜格子叩きの瓦片が出土した。12世紀前半の土坑SK05からは広東系白磁皿片・東播系須恵器碗片・鉄鎌が出土した。12世紀後半の土坑SK14/15からは完形の土師器小皿・杯が出土した。溝SD12は第2次調査検出の3号溝と同規模で、その延長の区画溝とみられる。箱崎遺跡では道路遺構や区画溝などの中世以降の町割に関わる遺構の検出例が少なく、貴重な例である。



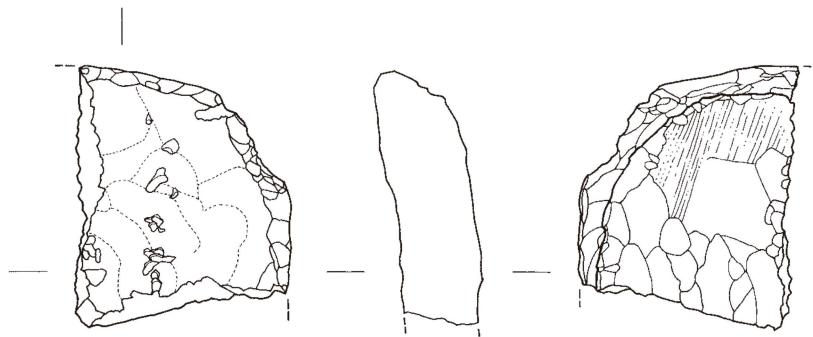
第18図 出土石製品実測図1 (縮尺1/2)



第19図 出土石製品実測図2(縮尺1/2)



15



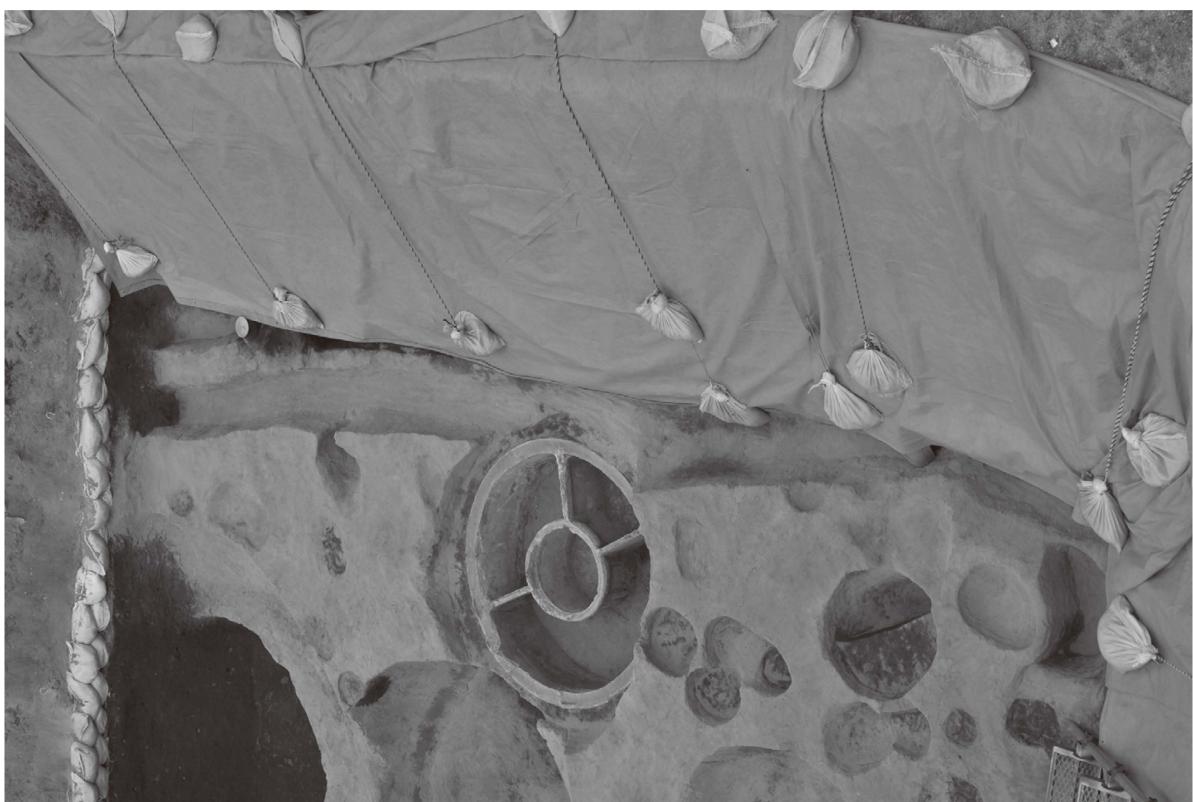
16

0 5cm

第20図 出土石製品実測図3（縮尺1/2）

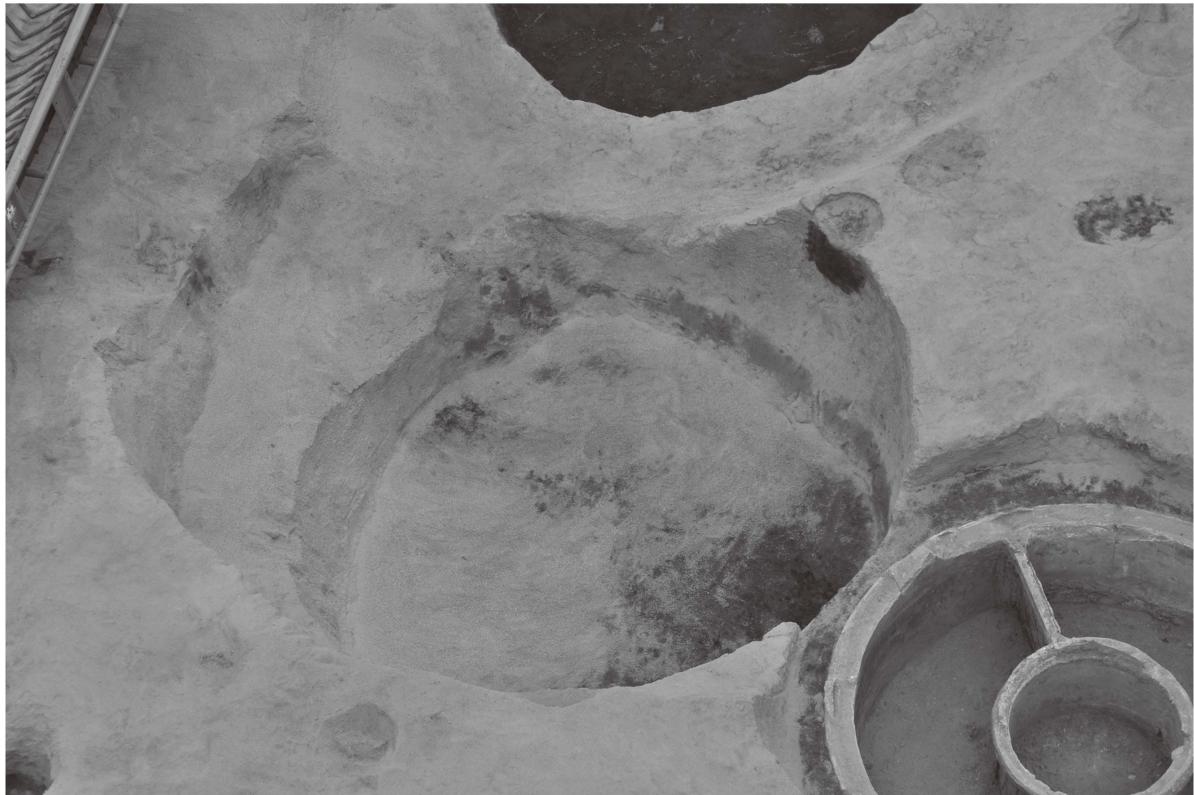


1. 箱崎遺跡第 90 次西側調査区（西から）

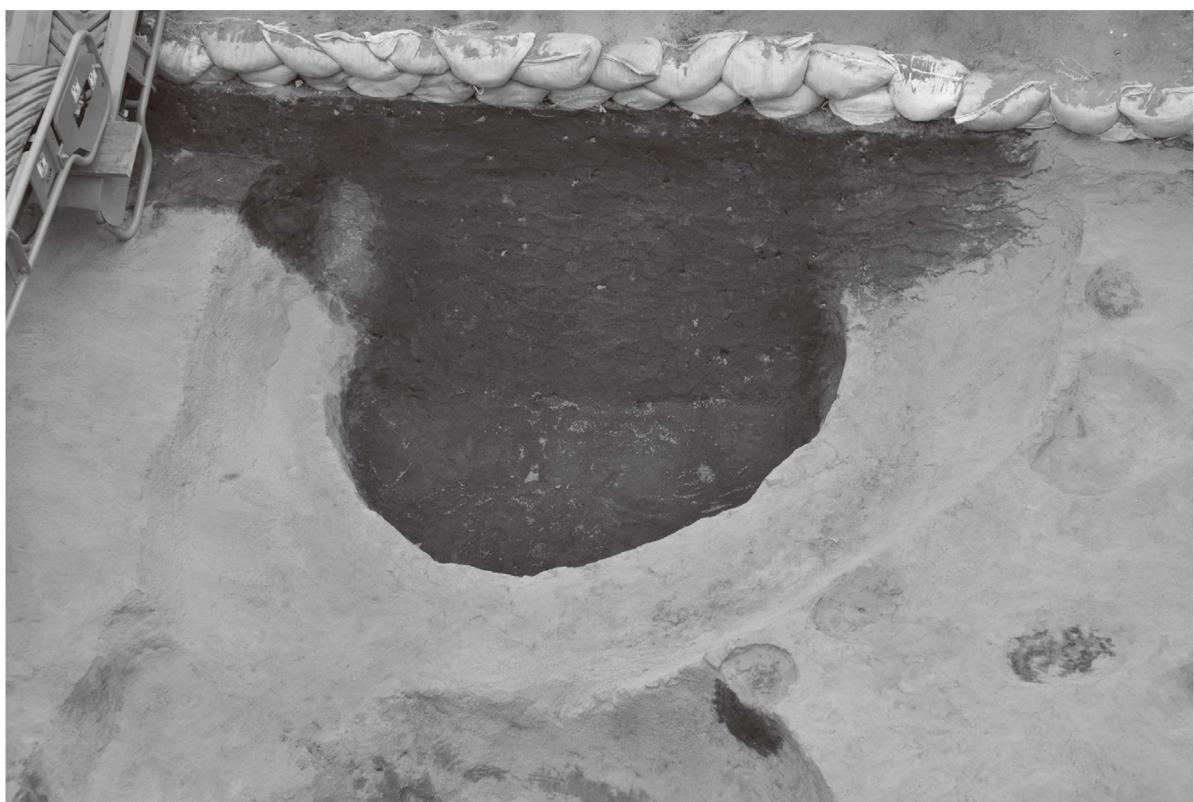


2. SD03 溝（西から）

図版 2

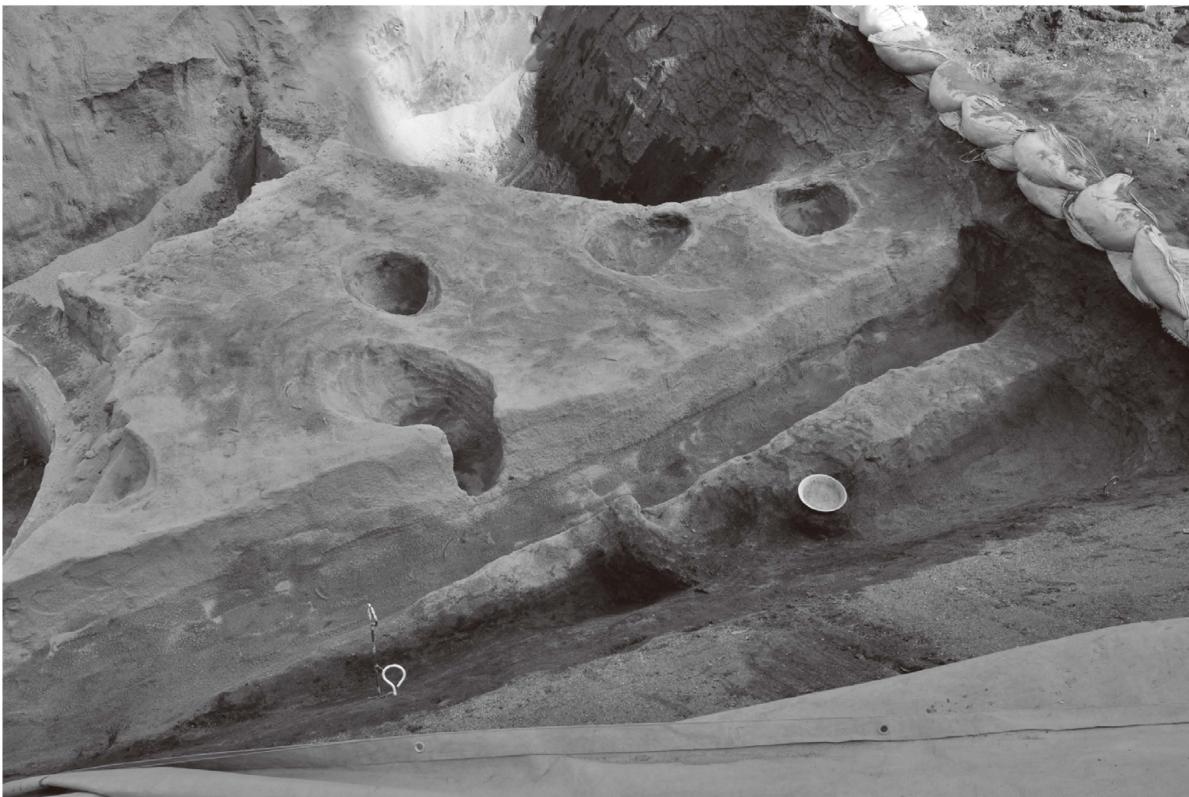


1.SE07 井戸（西から）

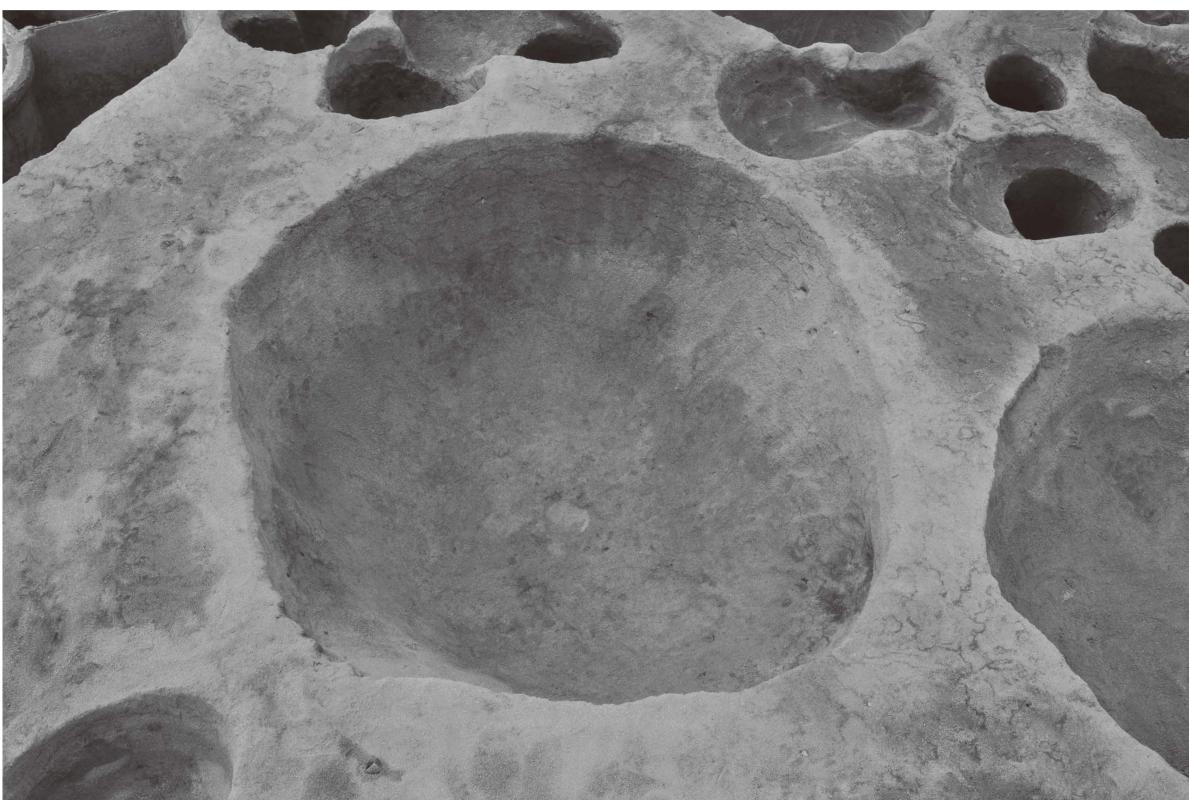


2.SE01 井戸上面検出状況（西から）

図版 3

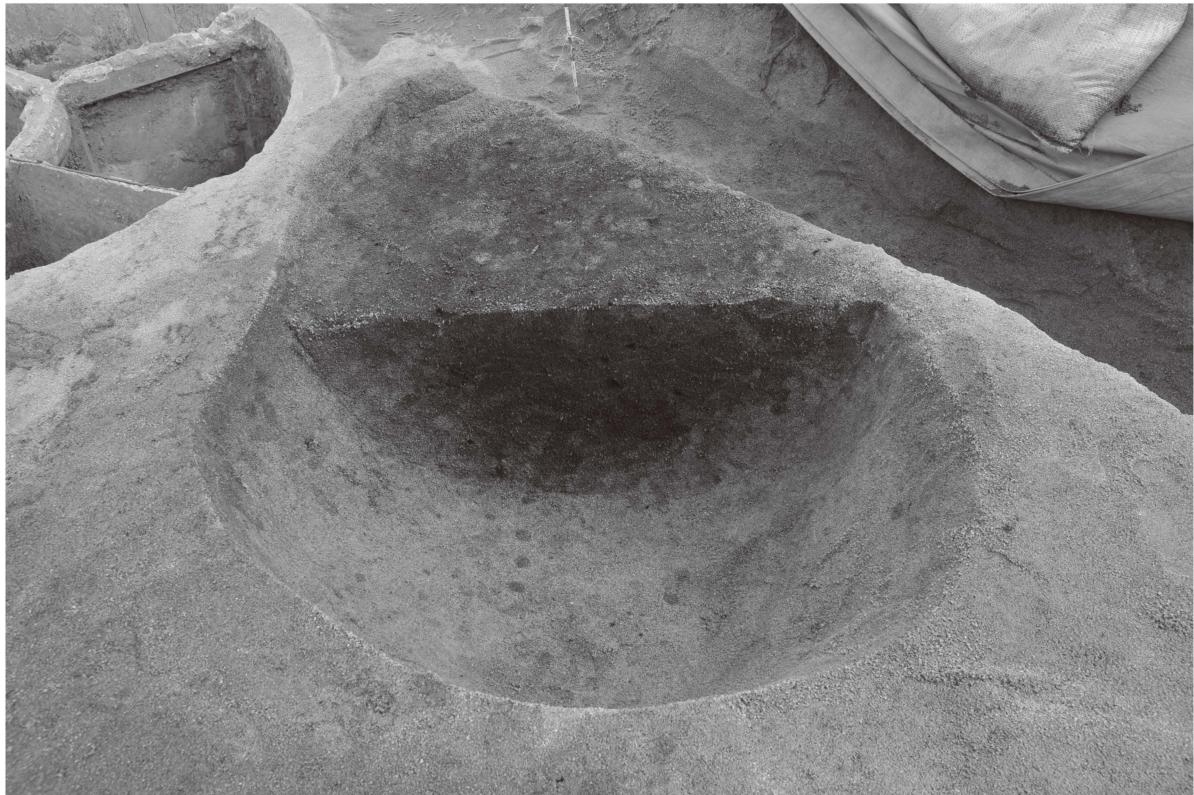


1.SD03 溝（南西から）

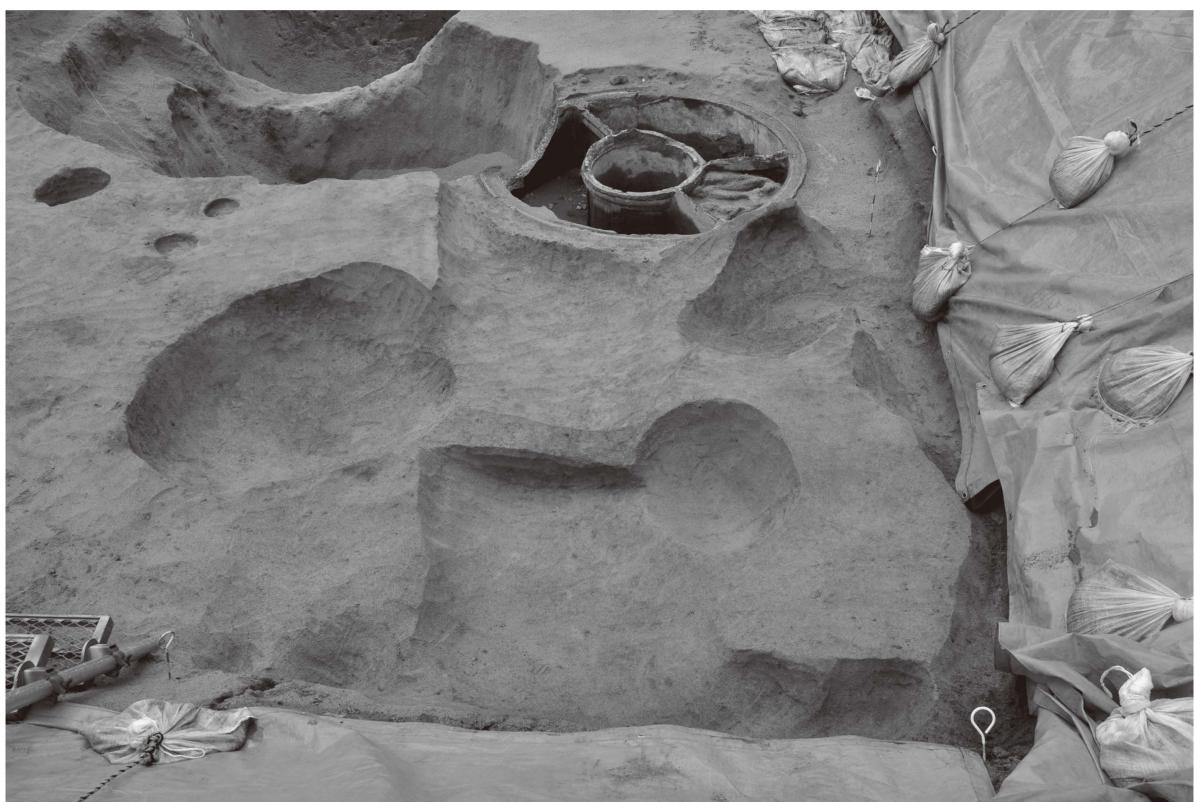


2.SK05 土坑（北から）

図版 4

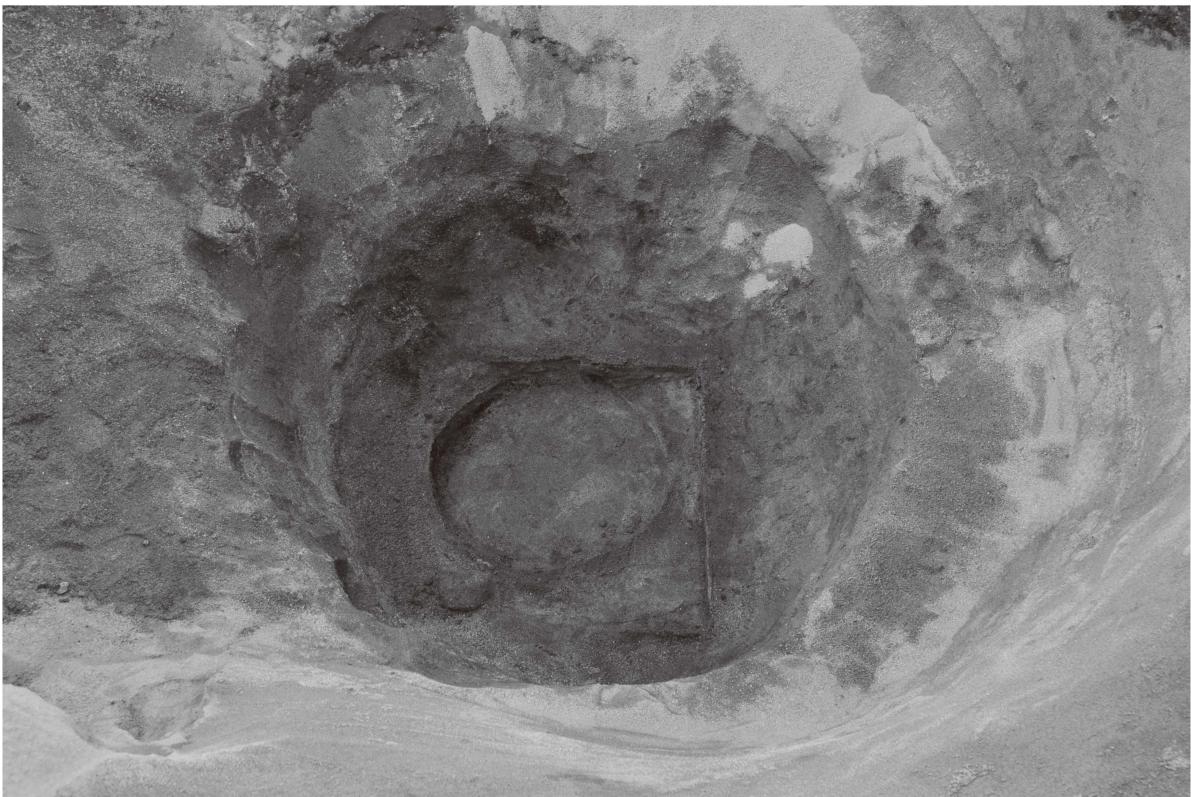


1. SK10 土坑（北西から）

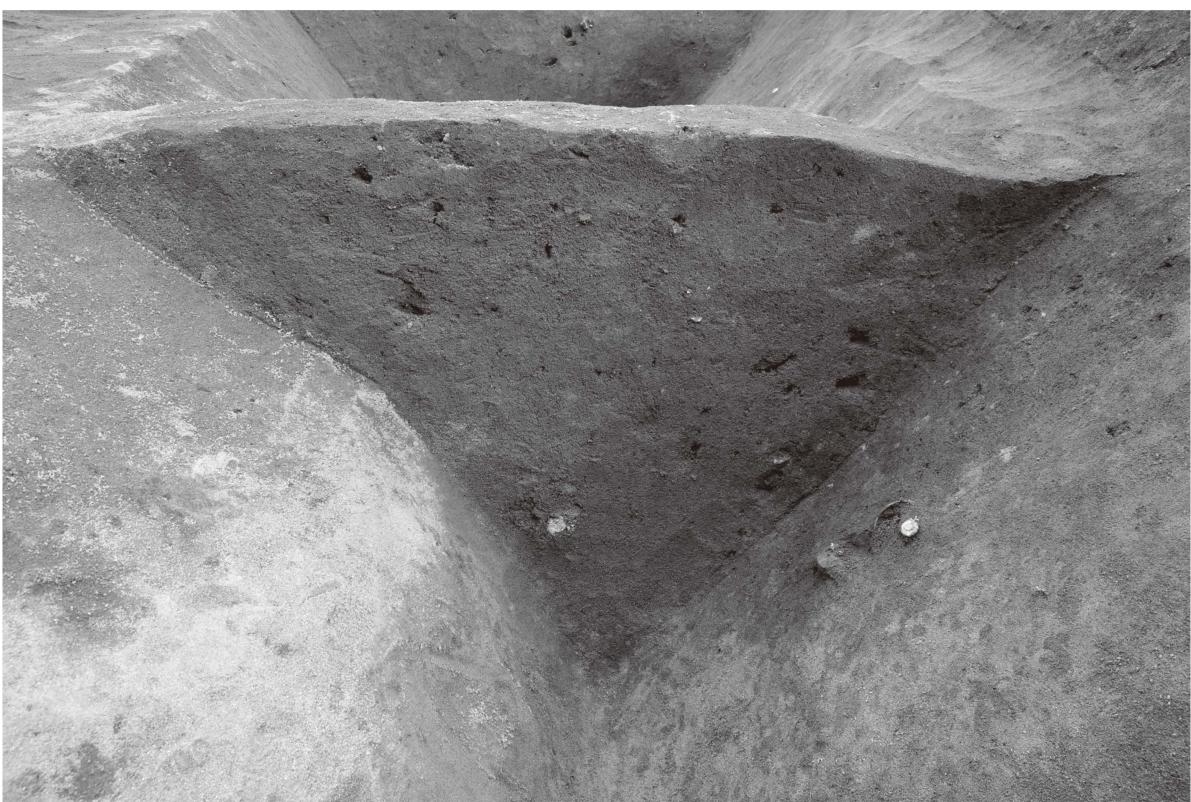


2. 箱崎遺跡第 90 次調査区西隅（西から）

図版 5



1.SE01 井戸（南から）

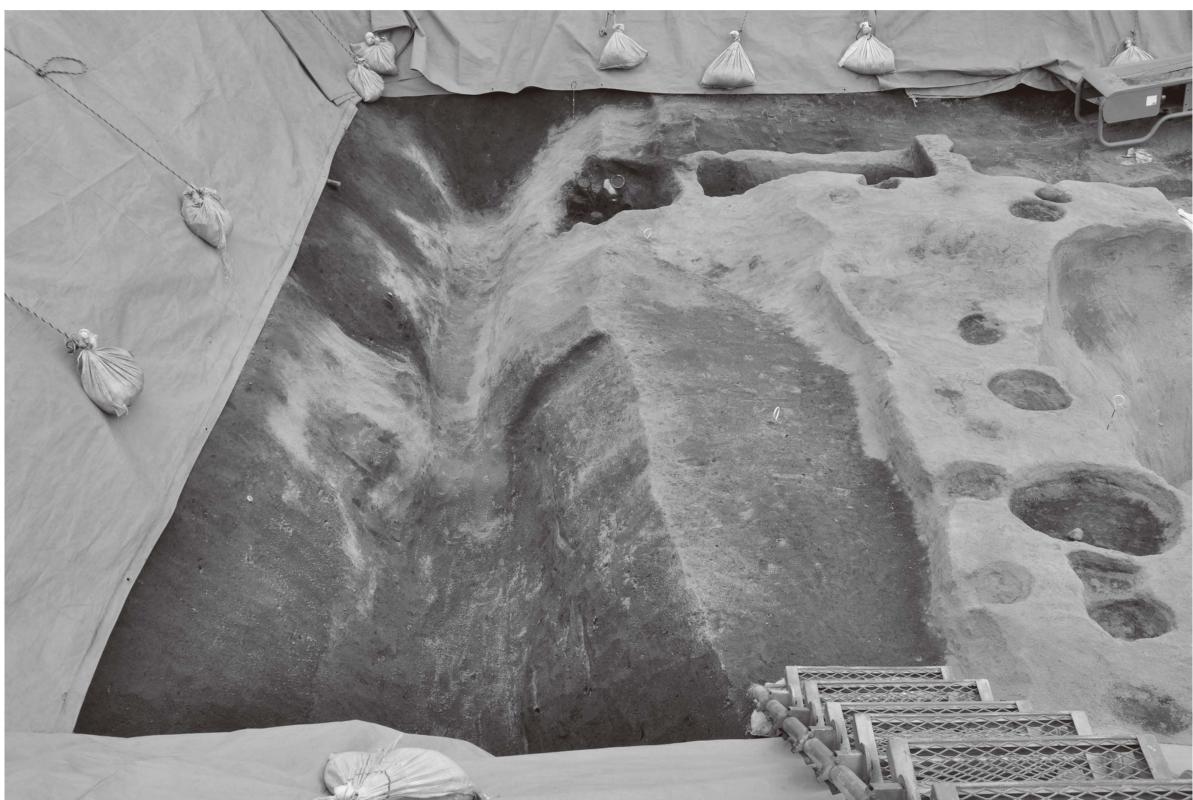


2.SD12 溝土層（南西から）

図版 6



1. 箱崎遺跡第 90 次東側調査区（西から）



2. SD12 溝（北東から）



1.SK14 土坑（北から）



2.SE13 井戸（南東から）

図版 8



1. Pit51 (南から)

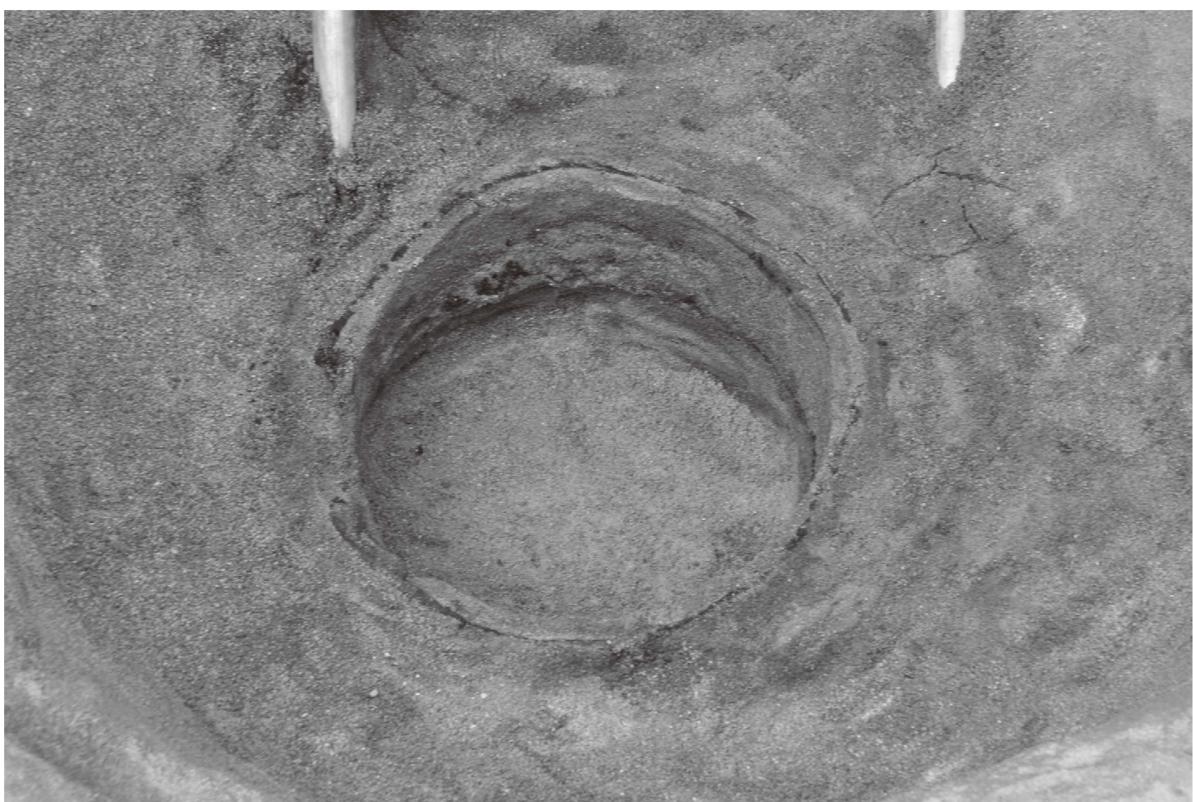


2. 東壁面土層 (北西から)

図版 9



1.SD12 溝・SE13 井戸（北西から）

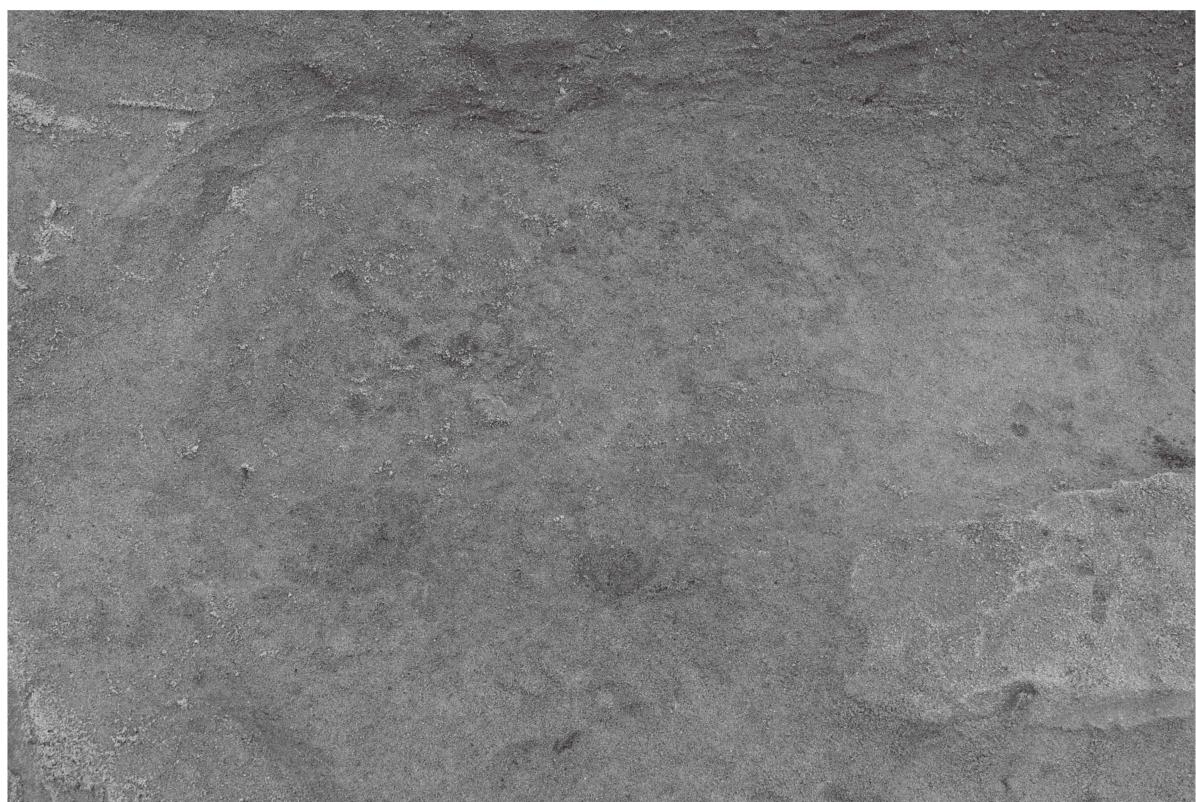


2.SE01 井戸枠（南から）

図版 10



1.SK15 土坑（西から）



2.SK16 土坑赤色顔料検出状況（北から）



1.SK16 土層（北から）



2.SE01 井戸枠（南から）

報告書抄録

ふりがな	はこざき 59							
書名	箱崎 59							
副書名	箱崎遺跡第90次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1424集							
編著者名	佐藤一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2021年(令和3年)3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかた いせきぐん 博多遺跡群 (第220次調査)	ふくおかしひがしく 福岡市東区 まいだじらちょうめ 99 ばん 馬出5丁目99番	40131	2639	33° 36' 45"	130° 25' 26"	20181001 ~ 20181121	138m ²	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
箱崎遺跡	集落	古代・中世	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器・陶磁器・ 石製品・金属製品				
要約	標高3.0m前後の黄灰色砂上面で検出した遺構は11世紀前半の井戸2基・溝2条、調査区南東で検出した溝SD03/04は幅0.5mの平行する東西溝で、SD03は延長12m検出した。土坑は12世紀前半と12世紀後半のものを検出した。調査区北東端で12c後半の井戸SE13、東端で15世紀前半の幅1.8m、断面V字の南北溝SD12を延長5m検出した。柱穴・ピット状遺構は古墳時代前期、11c前半から13c後半にかけてのものを40個検出した。黄灰色下面からは時期不明の炭化物が充满する土坑1・覆土に赤色顔料を含む土坑1・溝状遺構1を検出した。11世紀前半の井戸SE01/07からは黒色土器碗・土師器杯・白磁碗片・越州窯青磁碗片・斜格子叩きの瓦片が出土した。12世紀前半の土坑SK05からは広東系白磁皿片・東播系須恵器碗片・鉄鎌が出土した。12世紀後半の土坑SK14/15からは完形の土師器小皿・杯が出土した。箱崎遺跡では道路遺構や区画溝などの中世以降の町割に関わる遺構の検出例が少なく、貴重な例である。							

箱崎 59

—箱崎遺跡第90次調査報告—

2021年(令和3年)3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目16番24号